JICA海外協力隊OB·OG向け

クロスロード

CROSSROADS

2018
別冊

特集

教育現場で働くOB・OGの活躍に注目

OB･OGの皆様へ

日頃よりJICAボランティア事業に対しご支援を賜り誠に有難うございます。

10月末時点で累計派遣者数は約53,000名となり、53年間に亘り連綿と受け継がれた情熱は、今も世界70ヶ国以上で活動している約2,300名の隊員を通じて開発途上国の人々に繋がっています。

一方、国内の少子高齢化や労働力不足、深刻化する社会問題、不安定な国際情勢、地球規模課題の危機的状況など、急速に変化する情勢の中で、本事業も大きな転換期にあります。昨年来各方面の方々のご意見を伺いながら、様々なご指摘を頂戴しつつ、関係者の皆様のご理解とご支援の下、制度・事業の見直しに取り組んで参りました。

具体的には、2018年秋募集以降は従来の年齢区分から案件区分（一般案件とシニア案件）による募集となります。経費体系も一体的に見直し、現職参加者に対する人件費補てん制度も大きく変わります。

また、JICAボランティア事業[※1]により派遣される者[※2]の総称（呼称）を従来はJICAボランティアと表記していましたが、今後は“JICA海外協力隊”とします。近年、日本社会でボランティアが一般化し、様々な場面で使われるようになる中、「途上国の草の根レベルの開発協力の担い手であり、日本の顔の見える援助の代名詞」として、日本と途上国の信頼の礎となっている隊員活動をより適切に表すための見直しです。

青年海外協力隊の創設以来の、「参加者ひとり一人が高い志と世界に貢献する気概を持ち、現地の人々と共にある中で信頼を育み、活動を通じて世界と日本を理解する」という理念を改めて確認し、新たに「青年海外協力隊5か条」を定めました。

①共に暮らして心を通わせ
②異文化において日本の姿を知り
③実践のなかで世界を理解する。
④そして未来に続く高い志をもって
⑤あまねく人々と平和の道を歩む。

時代の変化に柔軟に対応しながら、普遍的価値である「平和」の使者として、社会に対し常に新たな視野を提供していくJICA海外協力隊を目指します。

最後になりましたが、皆様の益々のご活躍を祈念し、JICA海外協力隊に対する変わらぬご支援をお願い申し上げ、2018年度OB･OG向け『クロスロード』発行にあたってのご挨拶とさせていただきます。

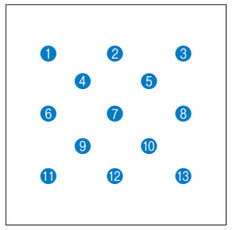
2018年12月
青年海外協力隊事務局長
山本美香

※1　事業名称は引き続き「JICAボランティア事業」です。
※2　各派遣者の呼称（青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、日系社会青年ボランティア、日系社会シニア･ボランティア）については、これまで通り「青年海外協力隊」を核とし、それ以外の3つは「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」に変更します（2019年度2次隊以降）。

JICA海外協力隊 OB･OG向け
クロスロード

CROSSROADS 2018
for ex-JICA・Volunteers
contents

04　JICA海外協力隊派遣現況
　～フロンティア人材の挑戦～
06　Take-Off Interview
10　JICAボランティア事業の動き
12　JICA VOLUNTEERS' 2018 TOPICS
特集
16　教育現場で働くOB･OGの活躍に注目
　教員として働くOB･OGの座談会
22　文部科学省インタビュー
24　訓練所の今
28　帰国後10年アンケート
資料編
30　JICA海外協力隊OB･OG会
　OB･OGによるSOCIAL BUSINESS
　OB･OGによる国際協力NGO
34　進路開拓インフォメーション
35　JICA INFORMATION



表紙写真

写真はいずれも協力隊OB･OGの帰国後の仕事･活動を収めたもの。
❶勤務先の小学校で協力隊の体験談を話す松畑愁梨さん（モンゴル･小学校教育･2015年度1次隊）
❷公益財団法人「ケア･インターナショナル ジャパン」のスタッフとして東ティモールにおける開発プロジェクトを視察する脇坂翠さん（パナマ･コミュニティ開発･2015年度2次隊＝右）
❸勤務先企業で外国人社員とともに自動車整備作業を行う大野辰徳さん（ベナン･自動車整備･2015年度4次隊＝右）
❹NPO法人「子供地球基金」のスタッフとして子どもたちの創作活動を支援する活動に携わる鵜澤優多さん（ベリーズ･美術･2015年度2次隊）
❺ベトナムにおける保健･医療分野のJICA草の根技術協力プロジェクトでワークショップの講師を務める今道由継さん（ドミニカ共和国･作業療法士･2015年度1次隊＝後列右端）
❻NPO法人「イルファー」が主催するケニアでの診療キャンプで鍼灸師として活動する石島裕太さん（ケニア･鍼灸マッサージ師･2015年度2次隊）
❼モロッコ･カサブランカの日本食レストランで働く露口聖代さん（モロッコ･料理･2015年度2次隊）
❽駒ヶ根青年海外協力隊訓練所で行われた東京グローバル･ユース･キャンプで高校生を相手に協力隊の体験談を話す辻ゆかりさん（モンゴル･体育･2015年度2次隊）
❾「アフリカを知ろう」と題したカフェでのワークショップで小学生とその保護者に協力隊の体験談を話す細矢香織さん（セネガル･家政･生活改善･2015年度1次隊）
❿NPO法人「NGO福岡ネットワーク」のスタッフとして国際協力イベントでのブース出展に携わる住本大輔さん（インドネシア･PCインストラクター･2015年度2次隊）
⓫小学校で協力隊経験の出前講座を行う前田秋季子さん（モロッコ･小学校教育･2015年度1次隊）
⓬小学校で日本語指導員を務める曽我奈那美さん（モザンビーク･青少年活動･2015年度3次隊）と教え子の外国籍児童たち
⓭開発コンサルタントとしてアゼルバイジャンにて上下水道プロジェクトの施工監理業務に携わる藤沼晋也さん（ナミビア･土木･2015年度4次隊＝右）

【アンケートへのご協力のお願い】

月刊『クロスロード』については、派遣中の隊員へのアンケート結果を踏まえ、今年度から紙媒体での配布からWeb版での配信に移行しております。

本OB･OG号についてもWeb化の検討を行っておりますが、OB･OGの皆様に広く意見をお聞きするために、登録いただいているメールアドレスにアンケートを送信しています。アンケートへのご協力よろしくお願いいたします。

なお、当方で最新のアドレスを把握できておらず、当該メールを受信されていない方におかれては、大変恐縮ですが、以下のアドレスにご一報をお願いします。折り返し、当方からアンケートのお願いをお送りします。

メールアドレス：jvtpc@jica.go.jp

青年海外協力隊事務局
人材育成課

※本誌では、JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）について、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2018年度2次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

「十字路」を意味する本誌の誌名は、国際協力に必要な「対話と行動」というイメージにも通じることに由来します。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY
レイアウト：S+M DESIGN FACTORY
印刷・製本：弘報印刷（株）

JICA海外協力隊 派遣現況

JICA海外協力隊の派遣者数の現状をまとめました。
2018年9月末現在、延べ派遣人数は5万2630人に達し、
78カ国で2295人が活動中です。

※表とグラフの数値は2018年9月末現在の人数（単位：人／延べ人数）
※JV：青年海外協力隊員　SV：シニア海外ボランティア
NJV：日系社会青年ボランティア　NSV：日系社会シニア・ボランティア

派遣国別（派遣中）

■ 欧州地域

国名	JV	SV	合計
セルビア		2	2
合計		2	2

■ 中東地域

国名	JV	SV	合計
エジプト	17	3	20
モロッコ	16	6	22
ヨルダン	34	1	35
合計	67	10	77

■ アフリカ地域

国名	JV	SV	合計
ウガンダ	48	3	51
エスワティニ	4	1	5
エチオピア	43	2	45
ガーナ	46	3	49
ガボン	18	9	27
カメルーン	19		19
ケニア	41	4	45
ザンビア	80	17	97
ジブチ	10		10
ジンバブエ	10		10
スーダン	30		30
セネガル	50	2	52
タンザニア	49	2	51
ナミビア	15		15
ブルキナファソ	16		16
ベナン	41		41
ボツワナ	14	1	15
マダガスカル	26		26
マラウイ	79	1	80
南アフリカ共和国	7	7	14
モザンビーク	37	2	39
ルワンダ	34		34
レソト	1	1	2
合計	718	55	773

■ アジア地域

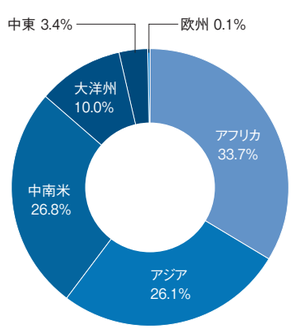
国名	JV	SV	合計
インド	6		6
インドネシア	19	1	20
ウズベキスタン	16	8	24
カンボジア	28	15	43
キルギス	27		27
スリランカ	61	7	68
タイ	37	6	43
タジキスタン		2	2
中華人民共和国	11		11
ネパール	45	3	48
東ティモール	30		30
フィリピン	36	1	37
ブータン	29	4	33
ベトナム	45	21	66
マレーシア	20	10	30
ミャンマー	6	6	12
モルディブ	9		9
モンゴル	37	3	40
ラオス	42	7	49
合計	504	94	598

■ 大洋州地域

国名	JV	SV	合計
キリバス	9		9
サモア	25	1	26
ソロモン	35	7	42
トンガ	15	3	18
バヌアツ	21	5	26
パプアニューギニア	27	4	31
パラオ	12	8	20
フィジー	24	3	27
マーシャル	8	5	13
ミクロネシア	10	7	17
合計	186	43	229

■ 中南米地域

国名	JV	SV	NJV	NSV	合計
アルゼンチン		14	5	3	22
ウルグアイ		8			8
エクアドル	42	4			46
エルサルバドル	1	1			2
ガイアナ		2			2
グアテマラ	34	3			37
コスタリカ	19	7			26
コロンビア	14	16			30
ジャマイカ	27	15			42
セントビンセント	2				2
セントルシア	8	1			9
チリ	6	6			12
ドミニカ共和国	41	9	4	1	55
ニカラグア	4	6			10
パナマ	17	1			18
パラグアイ	39	2	10	3	54
ブラジル			70	17	87
ベリーズ	14				14
ペルー	48	7			55
ボリビア	40	5	2	1	48
ホンジュラス	30				30
メキシコ		7			7
合計	386	114	91	25	616



地域別派遣人数の割合
（4ボランティアの合計）

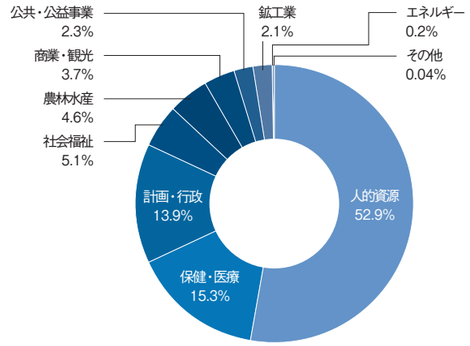
合計

	JV	SV	NJV	NSV	合計
派遣中	1,861 （813／1,048）	318 （234／84）	91 （32／59）	25 （6／19）	2,295 （1,085／1,210）
累計	44,233 （23,599／20,634）	6,411 （5,198／1,213）	1,455 （555／900）	531 （246／285）	52,630 （29,598／23,032）

※括弧内は男女の内訳（男性／女性）

分野別（派遣中）

分野名	JV	SV	NJV	NSV	合計
計画・行政	284	33	1		318
公共・公益事業	23	29			52
農林水産	83	22		1	106
鉱工業	22	26			48
エネルギー	1	3			4
商業・観光	43	41			84
人的資源	998	121	83	12	1,214
保健・医療	313	31	5	3	352
社会福祉	94	11	2	9	116
その他		1			1



分野別派遣人数の割合
（4ボランティアの合計）

出身都道府県別（派遣中）

都道府県名	JV	SV	NJV	NSV	合計
北海道	76	16	4	1	97
青森県	17	3			20
岩手県	14	1		1	16
宮城県	27	6	1		34
秋田県	10	1			11
山形県	15	2	2		19
福島県	32	6			38
茨城県	42	4	2		48
栃木県	30	3	1		34
群馬県	24	3	2		29
埼玉県	84	15	2	1	102
千葉県	74	12	2	1	89
東京都	209	60	8	8	285
新潟県	29	6	1		36
神奈川県	127	29	7	1	164
山梨県	13	1			14
長野県	37	3			40

都道府県名	JV	SV	NJV	NSV	合計
富山県	11	3	1		15
石川県	17	2	1	1	21
福井県	9	1			10
静岡県	64	7	2	2	75
岐阜県	39	3	2		44
愛知県	104	14	12	3	133
三重県	31	6	1		38
滋賀県	19	3	3		25
京都府	45	7	1		53
大阪府	119	14	7	1	141
兵庫県	93	16	5	1	115
奈良県	21	5	1		27
和歌山県	13	2			15
鳥取県	6	2			8
島根県	13	3		1	17
岡山県	40	2	1	1	44
広島県	37	10	1		48
山口県	20	6	1		27

都道府県名	JV	SV	NJV	NSV	合計
徳島県	14	2			16
香川県	12	1	2		15
愛媛県	15		3		18
高知県	8	1	1		10
福岡県	66	13	6		85
佐賀県	16	3	1		20
長崎県	33	3	1	1	38
熊本県	31	5	1		37
大分県	18	5	1		24
宮崎県	18	3		1	22
鹿児島県	40	2	2		44
沖縄県	29	3	1		33

Take-Off Interview

「3Dプリント義足」の製造・販売事業をスタート

3Dプリンターでつくる義足を途上国で販売する事業と、日本国内でのIターン就農。それぞれの分野で帰国後に新たな道を切り開き始めたOB・OGたちに、現在の仕事について話をうかがった。

#01

Tokushima Yutaka

徳島 泰さん

フィリピン・デザイン・2012年度1次隊
インスタリム株式会社 代表取締役CEO

とくしま・ゆたか●1978年生まれ、京都府出身。システムエンジニアや産業デザイナーとして、コンピュータ部品のベンチャー企業や大手医療機器メーカーに勤務した後、2012年6月、協力隊員としてフィリピンに赴任。貿易産業省ボホール州事務所に配属され、同国初とのなるFabLab（＊1）の設立支援に取り組む。14年12月に帰国。17年、合同会社インスタリムを設立。18年4月に株式会社化し、代表取締役CEOに就任。

――経営されているインスタリム株式会社の事業内容を教えてください。

徳島　CADソフト[＊2]と3Dプリンターを使って製作した「3Dプリント義足」を途上国で販売する事業です。従来の義足製作は、たとえば断端（脚の切断部分）を収める「ソケット」という部品の型を石膏で採るなど、非常に多くの手間がかかっていたんですね。そのため、どんなに安くても30万円程度を下回ることはありませでした。それに対し、3Dスキャンした断端のデータをもとにCADソフトでソケットを設計し、3Dプリンターで出力するといった弊社の工法では、3〜5万円の価格帯が可能になります。現在、JETROのASEAN新産業創出実証事業[＊3]に採択された取り組みとして、事前の実証実験をフィリピンで行っているところで、来年の2月ごろには事業がスタートする見込みです。

――会社はどのような体制になっているのでしょうか？

徳島　現在、スタッフは私を入れて7人の体制で、日本人とフィリピン人の義肢装具士が1人ずついます。私はエンジニアや産業デザイナーのキャリアがありますので、CADソフトや3Dプリンターの開発などは自分で行っていますが、そのほかの財務やプロジェクトマネジメント、AI開発といった業務に関しては、専門性を持った方々に担当していただいています。パートタイムや副業として携わっていただいている方もいるのですが、弊社は「スタートアップ」[＊4]と呼ばれるタイプの企業なので、報酬を現金だけでなくストックオプション[＊5]を付与する形にさせてもらうなど工夫することで、精力的に取り組んでいただいています。日本人スタッフは、起業支援プログラムやYouTubeなどで私が発信した事業内容に賛同し、集まってくれた人がほとんどです。

――起業の構想を持ち始めたのはいつごろでしょうか。

徳島　3Dプリント義足に着目したのは協力隊時代で、2014年です。私はデザイン隊員として、3Dプリンターなど最先端の工作機械を置く市民向けラボの立ち上げに携わったのですが、現地の人によく、「3Dプリンターで義足をつくることはできないのか？」と聞かれたんですね。義足が簡単につくれるなら、価格も下がり、多くの人が買えるようになるというわけです。そこで私は、ラボの3Dプリンターで義足を試作してみたんですね。すると、義足製作に合ったCADソフトや3Dプリンターを開発すれば、アナログの工法よりはるかに少ない手間でつくれるということが見えてきた。しかし当時は、たとえ公益性の高い目的であっても、CADソフトや3Dプリンターの開発資金を支援してくれるような公的サービスを見つけることはできませんでした。それならば、協力隊の任期を終えた後に、ビジネスとして取り組んでみようと考えたのでした。

――その後、実際に起業するまではどのような道のりだったのでしょうか。

徳島　帰国後はまず、知人が経営する会社に受け入れていただき、そこで義足製作用のCADソフトや3Dプリンターの開発、それと同時にフィリピンでの事業開始に必要な調査や検証などを進めました。調査や検証にはJICAの「中小企業海外展開支援事業」のプログラムも活用させていただいています。独立して会社を立ち上げたのは昨年3月です。

――会社経営は初めてですか。

徳島　協力隊に参加する前に、ベンチャー起業で6年ほど経営にかかわっていたほか、4年ほどウェブシステムをつくる仕事を個人事業主としてやっていますが、自分が代表となり、人を雇用して会社を経営するというのは初めてです。弊社はさまざまな分野の専門家が集まったチームですので、CEOとして彼らとしっかり議論していくためには、自分自身もすべての分野について勉強しつつ、彼らへのリスペクトも忘れてはいけない。そういう大変さはありますが、せっかく協力隊で大きな仕事を経験させていただいたからには、社会課題を解決するビジネスをファミリービジネスなど小さな規模でやる必要はないかなと思っています。というのも、協力隊として派遣されている間、その国の社会課題を目の当たりにし、小さな規模の取り組みではいつまで経ってもその解決には至らないことを経験を通して十分に理解したからです。フィリピンの例で言うと、義足を必要とする人は120万人以上に上り、そのうち義足が買える人はわずか数万人という状態なんですね。そうした社会課題に真剣に向き合おうとするならば、小さく、気楽にやるという選択肢を選ぶ必要はない。これは、私が協力隊で得ることができたマインドセットのひとつかもしれないですね。

――事業の今後の見通しは？

徳島　まずは10台ほどの3Dプリンターを備えたデジタル義足製作所をマニラにつくり、現地の営業員と義肢装具士が病院を回っての営業活動を始める予定です。ソケットを患者さんが痛みを感じず快適な状態にまで仕上げるには、3Dプリンターで出力したものを再加工していくという作業が必要なのですが、義足の製作実績が1000件程度にまで達したら、それらで得たデータをもとに、「このような断端ならば、このようなソケットの形状がいい」という形状のレコメンドをAIにさせるようにするつもりです。そうすると製作の手間が減り、価格をさらに下げることができるので、途上国のより多くの人が入手できるようになります。フィリピンでそのあたりまで進んだら、次は人口が多いインドで事業を開始する予定です。しかし、目標は「すべての人が義足を手に入れられる世界の実現」。そこに向かって少しずつ事業地を広げていきたいと思っています。

フィリピンでの事業開始に向けて試作した義足を装着する患者

＊1 FabLab…「Fabrication Laboratory」の略。ファブラボ。インターネットで世界的にネットワーク化された3Dプリンターやレーザーカッターなどの工作機械を備え、市民に開放されたものづくりラボ。
＊2 CADソフト…コンピュータによる設計（CAD／キャド）のためのソフトウェア。
＊3 日ASEAN新産業創出実証事業…ASEANにおける日本企業の市場獲得の支援を目的に、新産業創出のための実証事業などを行うプログラム。JETRO（独立行政法人日本貿易振興機構）が運営を受託している。
＊4 スタートアップ…新しい事業領域の開拓を目指す企業。事業が軌道に乗った後の急成長が見込まれる。
＊5 ストックオプション…自社株をあらかじめ決められた価格で購入できる権利。

インスタリム株式会社

https://www.instalimb.com

設　　立：2017年3月31日（前身の合同会社として）
代 表 者：徳島 泰（代表取締役CEO）
所 在 地：東京都世田谷区池尻2-4-5
（世田谷ものづくり学校内）
事業内容：3Dプリント義足の開発・製造・販売

#02

OB・OG夫婦でIターンし複合的農業をスタート

Igarashi Sayaka
五十嵐 早矢加さん（旧姓・嶋田）
キルギス・村落開発普及員・2010年度3次隊
農園「ベレケの村」副代表

×

Igarashi Daisuke
五十嵐 大介さん
キルギス・家畜飼育・2009年度3次隊
農園「ベレケの村」代表

いがらし・さやか●1984年生まれ、奈良県出身。関西学院大学商学部を卒業後、商用自動車メーカーに勤務。2011年1月、協力隊員としてキルギスに赴任。イシククリ州内の県役場に配属され、一村一品運動の支援に取り組む。13年1月に帰国した後、北海道浦河町に地域おこし協力隊員として着任。特産品の開発などに取り組む。2016年5月、夫・大介さんとともに千葉県南房総市に移住し、就農。

いがらし・だいすけ●1984年生まれ、兵庫県出身。酪農学園大学を卒業後、食品会社に技術職として勤務。2010年1月、協力隊員としてキルギスに赴任。イシククリ州内の県役場に配属され、地域の農家を対象に、家畜飼養管理の現状に関する調査や助言などに取り組む。12年1月に帰国。乳業メーカー勤務などを経て、2016年5月、妻・早矢加さんとともに千葉県南房総市に移住し、就農。

※お話は大介さんに伺いました。

――生産している品目を教えてください。

五十嵐　メインは、この南房総市が国内で生産量第一位であるカレンデュラ*という花です。同じようにここで生産が盛んなソラマメ、エダマメ、食用の菜の花、コメなどにも力を入れているほか、ミニトマトやバジル、あるいはキルギスの料理によく入っていたビーツという実物野菜など、とにかく興味を持った品目をいろいろと試しています。作物はそのまま販売するだけでなく、加工して販売するということもしており、形が悪いミニトマトの規格外品はソースなどに加工していますし、カレンデュラを材料とした石けんやリップクリームなどのコスメ商品も出しています。

――販売はどのようなルートで？

五十嵐　現在は農協と道の駅、ネット販売という3つが主な販路です。観光客が通る海岸沿いの道には、かつて土産物店だったスペースを借りて直販店を構えているのですが、閑散期は人が通らず、テナント料も売り上げに連動した金額としていただいているので、現在は暖かい観光シーズンだけ開けることにしています。

――農業のやり方で特にこだわっている点などはあるのでしょうか。

五十嵐　私たちは協力隊時代、キルギスの同じ州で暮らしたのですが、そこでは、牛や羊を飼い、その糞を使ってさまざまな作物を育てるという複合的な農業を、こぢんまりした規模で営むというのが一般的でした。自然に負担がかからないそうした農業のあり方に魅力を感じ、日本でそれを実践してみたいというのが、就農する道を選んだそもそもの動機です。ですので、さまざまな作物を育てること、あるいは地元で手に入る海藻や馬糞などを肥料にして、なるべく農薬を使わないことなどにはこだわっています。

――就農はいつ考え始めたのでしょうか。

五十嵐　協力隊の任期を終えた時点では就農するつもりはなく、私は千葉の乳業メーカーに再就職しています。その後、結婚を決め、2人で将来のビジョンを話し合うなかで、キルギスの農家と似たような暮らしをしてみたいということで、新規就農を考え始めました。

――カレンデュラをメインの作物とすることを選んだ理由は？

五十嵐　私は大学で畜産を学んでいるので、最初は北海道で肉牛の飼育を中心とした複合的農業をやりたいと考えたんですね。そうして、妻とともに浦河町に移り住み、妻が地域おこし協力隊員として活動する一方、私は黒毛和牛の畜産農家で1年ほど研修を受けています。ところが、町内で売ってもらえる土地は何千万円もする広大な土地ばかりであったことから、浦河町での就農は断念しました。その後、何をメインにするかをあらためて検討したのですが、そこで着目したのが、キルギスの任地で食用や薬用としてよく売られていたカレンデュラでした。調べてみると、日本では仏花として使われることがもっぱらで、食用や薬用にされることは少ない。ならば、仏花以外の用途をアピールすることで新たな市場が開拓できるかもしれないと考え、メインの作物とすることにしました。

――実際に就農するまで、どのようなプロセスを辿ったのでしょうか。

五十嵐　カレンデュラづくりの研修が受けられるところをインターネットで探したのですが、そこで見つけたのが、南房総市のホームページで紹介されていた私の師匠でした。面接を受け、受け入れていただけると決まったので、妻とともにここに移住し、弟子入りします。市から私に毎月5万円、師匠には3万円が支払われるという、新規就農の促進を目的とした市のプログラムでした。

――独立にあたっての苦労は？

五十嵐　新規就農のための研修は、師匠の田畑で農作業を手伝いながら学び、独立するときには自分で農地を探さなければならないというのが一般的です。しかし、「素性のよくわからない人には農地を貸したくない」という農家も多く、Iターン就農を目的に研修を受けたものの、農地が得られなくて就農を断念するというケースも少なくありません。一方、私の師匠は先々をよく考えてくれる方で、「就農するなら、1年目から勝負したほうがいい」と言って、私たちのために畑を借り、研修の冒頭から自力での生産に挑戦させてくださったんですね。そのため、研修が終わった今年8月以降も、同じ畑をそのまま借り続けることができたので、独立にあたっての苦労はほとんどありませんでした。

――協力隊の経験は、その後の生き方にどのような影響がありましたか。

五十嵐　新規就農者を呼びこむため、町役場が生産する品目を決め、その開始に向けたお膳立てをするということも多く、そうした町役場主導の新規就農のほうが日本では人気です。先々の不安が少ないからです。しかし私たちは、いつ、何をつくるか、すべてを自分で考えるという道をとりました。その決断ができたのは、協力隊経験によって、先々について「なんとかなる」と楽観的に捉えることができるようになったからだと感じています。「自分ですべてを考える」というのは、リスクもすべて自分で負わなければならないということなので大変ですが、やはり、会社員時代には味わえなかった醍醐味がありますね。

――今後の見通しを教えてください。

五十嵐　まずは安定した収入が得られるようにするのが先決です。師匠には「続けていれば、生産は徐々にうまくなっていくので心配ない。むしろ、あなたたちのような若い新規就農者の頭の使い所は『売り方』を考えることだ」と言われています。この地域の農家の販路は主に農協ですが、ネット販売などの小売のほうが利益率は高い。そのため、パッケージやホームページを工夫するなどして「ベレケの村」という私たちの屋号のブランディングに力を入れており、そうした努力は今後も続けていくつもりです。

そうして農業自体が軌道に乗ったら、都市部の人たちに農業体験の機会を提供し、農をとおして人々がつながる場となれるよう、ゲストハウスの運営などにも手を広げていきたいと考えています。

今年の秋にネット販売した詰め合わせ商品の中身。トマトの加工品3点（ソース、ドレッシング、ジャム）、コメ（ひとめぼれ）、サツマイモ

農園「ベレケの村」
http://www.berekenomura.com/

開　　園：2016年8月
代 表 者：五十嵐大介
所 在 地：千葉県南房総市白浜町
事業内容：農産物の生産・加工・販売
ショップ：千葉県南房総市白浜町白浜623-14
（金・土・日・祝日の10：30〜15：00）

*カレンデュラ…ヨーロッパ原産のキク科の草花。和名はキンセンカ。開花は春で、色はオレンジ色や黄色。日本では主に仏花として、ヨーロッパでは主に民間薬として使われる。

JICAボランティア事業の動き

JICAボランティア事業に関するこの1年の主な変更点をまとめました。

制度

■人件費補てん制度の廃止

2018年度春募集より人件費補てん制度が廃止され、2018年度秋募集から新たに現職参加促進費が導入されました。

■呼称と種類の変更

2018年度秋募集合格者より、「JICAボランティア」という総称を「JICA海外協力隊」に改めました。また、従来の年齢区分に代えて、専門性による区分が導入され、青年海外協力隊以外は呼称も変更されます。概要は以下のとおりです。

案件区分 ＼ 対象年齢	20〜45歳	46〜69歳
一般案件 ※幅広い技能・経験で応募可能。 ※応募は「職種」に対して行う。	青年海外協力隊／日系社会青年海外協力隊	海外協力隊／日系社会海外協力隊
シニア案件 ※一定以上の経験・技能が求められる。 ※応募は「案件」に対して行う。	シニア海外協力隊／日系社会シニア海外協力隊	

■派遣開始から節目を迎えた国々

2018年にJICA海外協力隊の派遣開始から節目の年を迎えたのは以下の国々です。

周年	派遣国
50周年（1968年派遣開始）	エルサルバドル（JV）
40周年（1978年派遣開始）	パラグアイ（JV）、ボリビア（JV）
30周年（1988年派遣開始）	インドネシア（JV）、ブータン（JV）、バヌアツ（JV）
20周年（1998年派遣開始）	インドネシア（SV）、フィジー（SV）
10周年（2008年派遣開始）	キリバス（JV）、ガイアナ（SV）

■応募者数／合格者数

（2017年度秋・2018年度春）

募集時期	ボランティア種別	応募者数（人）	合格者数（人）
2017年度秋募集	青年海外協力隊／日系社会青年ボランティア	1235	540
	シニア海外ボランティア	564	89
2018年度春募集	青年海外協力隊／日系社会青年ボランティア	1072	513
	シニア海外ボランティア／日系社会シニア・ボランティア	250	32
合計		3121	1174

募集

■「JICAボランティア募集事務局」の設置

2018年度春募集より、JICA海外協力隊への参加に関する疑問・不安の解消を手伝う専属の「JICAボランティア募集事務局」を設置し、情報を提供しています。それに伴い、2月23日にJICA海外協力隊ウェブサイトを改修しました。同ウェブサイトでは「お気軽質問窓口」「WEB説明会」「OB/OGのビデオ相談」などの新たなコンテンツが導入されました。

JICA海外協力隊ウェブサイト
https://www.jica.go.jp/volunteer/

■「全国説明会キャラバン」が始動

2018年3月10日より、JICAボランティア募集事務局が運営する「全国説明会キャラバン」が開始されました。参加者の不安や疑問などについて、JICA海外協力隊経験者が答える座談会も組み込まれています。年間を通じて、全国約50カ所で順次開催されています。

広報

■俳優の斎藤工さんがJICA海外協力隊の活動を紹介

2018年3月25日、俳優の斎藤工さんがJICA海外協力隊の「今」を追う旅に出るテレビ番組「いつか世界を変える力になる」の第2弾がBSフジで放送されました。斎藤さんが訪れたのは、二本松訓練所で訓練中のJICA海外協力隊候補生たちとパラグアイの派遣中隊員。この番組は、「YouTube／JICA青年海外協力隊事務局公式チャンネル」（URLは裏表紙をご覧ください）で公開中です。

■『クロスロード』誌のウェブ公開がスタート

2018年11月号より、『クロスロード』誌の通常号をJICA海外協力隊のウェブサイト内で公開することになりました。

https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

■隊旗デザインをJOCVのシンボルマークに

青年海外協力隊訓練所ではおなじみの「隊旗」のデザインを、このたび改めてJOCVのシンボルマークとして制定しました。今後は、広報パンフレットやウェブサイトなどで積極的に活用していきます。また、2018年度2次隊より、派遣前訓練の修了時にシンボルマークのバッジを配布します。

JICA VOLUNTEERS' 2018 TOPICS

JICA海外協力隊のOB・OGや関係者に関連するニュースの一部を紹介します。

TOPIC 2018 01

渡辺栄一さん（ケニア・電話線路・1977年度1次隊）

電話線路隊員OBが「日本ITU協会賞」を受賞

協力隊OBでNPO法人「BHNテレコム支援協議会」参与の渡辺栄一さん（ケニア・電話線路・1977年度1次隊）が今年度の「日本ITU協会賞・功績賞」を受賞した。一般財団法人日本ITU協会による同賞は、情報通信分野と放送分野における国際標準化や国際協力に関する活動で優れた功績をあげた個人・団体を顕彰するもの。

渡辺さんは協力隊に参加した後、日本電信電話公社／NTT東日本の社員、およびNPO法人BHNテレコム支援協議会の参与として、主に東南アジアの国々で情報通信分野の国際協力事業に従事。電気通信網の拡充やそれを担う人材の育成に取り組んできた。今回の受賞は、通算で20年以上にわたるそうした一連の貢献が評価されたものだ。

わたなべ・えいいち●1948年生まれ、東京都出身。NTT大学部を卒業後、77年10月に協力隊員としてケニアに赴任。ケニア郵電公社に配属され、電気通信網設備に関する設計指導に従事。帰国後、日本電信電話公社／NTT東日本に勤務。インドネシアの電気通信網拡充計画、カンボジアやベトナムの電気通信網復興計画などに携わる。住友電気工業（株）社員を経て、2014年からBHNテレコム支援協議会の参与。（写真は同協議会の活動でミャンマーに駐在する渡辺さん）

受賞の言葉

今回の受賞は、途上国で地道に仕事をしてきたことを評価していただいたものと感謝しています。

協力隊時代、私はケニア全土の電気通信網設備の計画・設計・実施を任されました。そうした大規模な業務を1人で任されるというのは私にとって初めての経験であり、勉強に明け暮れる毎日でした。一方、ケニア人とのコミュニケーションにも積極的にトライし、彼らから生活の知恵を教わっていきました。そうして2年間、途上国で現地の人と仕事を共にした経験は、後に会社員として海外事業に参画し、現地企業とのジョイント・オペレーションを進めるうえで大変役立ちました。他国の方々と仕事を行う際、合意を取り付けながら進めることがいかに重要であるかを学べていたからです。

BHNテレコム支援協議会に移ってからは、インフラが整わないミャンマーのエーヤワディ地域で、住民に情報を伝達するシステムの設置やハザードマップの作成・設置に携わっています。同地域は、商用電力などの基本的なインフラがない環境が私の協力隊時代のケニアと似ているため、自信を持って業務にあたることができています。今後は、同地域での実績を国内の他地域に水平展開するなど、しばらくは現役で努力していきたいと思っています。

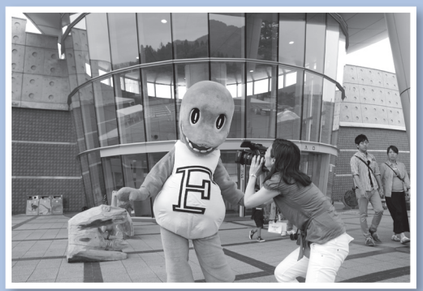
TOPIC 2018 02

岩田早希代さん（マラウイ・映像・2011年度2次隊）

映像隊員OGが「地方公務員アワード2018」を受賞

高い成果をあげた地方公務員を顕彰するイベント「地方公務員が本当にすごい！と思う地方公務員アワード2018」（運営・株式会社ホルグ）が今年8月に行われ、福井県総務部広報課に勤務する協力隊OG、岩田早希代さん（マラウイ・映像・2011年度2次隊）が受賞した。

岩田さんは2016年7月に3年の任期で採用された情報発信専任職員。観光名所や伝統工芸、特産品、祭りなど、県の魅力を各種SNSで紹介する業務を一手に担う。5分間の動画を随時アップロードする広報課の公式YouTubeチャンネル『おいでよ！ふくい』では、企画や編集などの裏方作業だけでなく、「自撮り」でレポーター役も担当。月に1本以上というハイペースで動画のアップロードを続けるバイタリティー、動画にあふれるエネルギーや地元愛などが評価されての受賞だ。



いわた・さきよ●1983年生まれ、福井県出身。大学を卒業後、NHK福井放送局で番組ディレクターを務める。2011年9月、協力隊員としてマラウイに赴任。保健分野で活動するNGO「ポピュレーションサービス・インターナショナル・マラウイ」に配属され、啓発用動画の制作に携わる。帰国後、番組ディレクターなどを経て、16年7月に福井県庁に入職。（写真はいずれもロケの様子。上写真は庁舎前、下写真は福井県立恐竜博物館前）

受賞の言葉

他の受賞者は素晴らしい功績をあげている方ばかりなので恐縮しています。しかし、自分がやってきた仕事、完全自主制作でコンスタントにPR動画を制作・配信するという仕事は、自治体職員として誰も成し得なかったことなのだと、あらためて自信を持ちたいと思いました。

協力隊員としてマラウイで制作していた動画はマラリアやHIV／エイズの予防啓発ツールでしたが、住民の識字率や情報媒体の訴求スタイルが日本とは違うなか、それを考慮した新たな演出方法を学ぶことができました。「ミュージックビデオのようにBGMをふんだんに盛り込む」「ドラマ仕立てにする」といった方法です。その経験が、『おいでよ！ふくい』の動画制作でテンポの良さや見やすさを意識することにつながっています。

SNSへの投稿は、写真と動画を合わせると年間200回を超えます。県内各地を飛び回ってこれほどの量の取材を行うには、物怖じせず現場に飛び込んでいく行動力や社交性が必要ですが、それが培われたのも協力隊経験を通じてでした。

今後も、地域とのかかわりあいを大切にしながら業務にあたり、ふるさとに貢献していきたいと思っています。

TOPIC 2018 03

井出留美さん（旧姓：小山田／フィリピン・食品加工・1994年度1次隊）

食品加工隊員OGが「食生活ジャーナリスト大賞」を受賞

食に関する情報発信や食文化で優れた活動を行っている個人・団体を顕彰する「食生活ジャーナリスト大賞」（主催・食生活ジャーナリストの会）。第2回となる今年度は、協力隊OGで食品ロス問題専門家、株式会社office3・11代表取締役の井出留美さん（フィリピン・食品加工・1994年度1次隊、旧姓・小山田）が「食文化部門」で受賞した。

同部門は、地域の食文化の継承、学校や地域での食育など、さまざまな活動を含む広い概念としての「食文化」に関する活動を対象とするもの。井出さんは日本ケロッグ合同会社の広報室長を務めていた時期に東日本大震災の被災地支援に携わった際、「組織に所属していてはできる仕事に限りがある」とのジレンマを感じ、独立。その後、まだ食べられるけれどもさまざまな理由で廃棄される運命にある食品を、食の支援を必要とする人々に届ける活動を行うNGOの広報を請け負う。そのなかで、まだ食べられる食品が大量に廃棄される「食品ロス」の問題に着目。以後、著書『賞味期限のウソ 食品ロスはなぜ生まれるのか』（幻冬舎新書）、『Yahoo!ニュース個人』での記事執筆、講演などを通じて、「食品ロス」の問題に警鐘を鳴らす活動を展開する。今回の受賞は、この問題を全国的に注目されるレベルにまで引き上げた功績が評価されたものだ。

いで・るみ●奈良女子大学食物学科卒、栄養学博士。大手化学メーカー勤務を経て、1994年7月、協力隊員としてフィリピンに赴任。国立タルラック州大学に配属され、余剰農産物の活用推進に従事。帰国後、日本ケロッグ合同会社の広報室に勤務。東日本大震災の復興支援に携わったのを機に、（株）office3・11を立ち上げて独立。以後、まだ食べられる食品が大量に廃棄される「食品ロス」の問題に警鐘を鳴らす活動を展開。2016年発表の幻冬舎新書『賞味期限のウソ 食品ロスはなぜ生まれるのか』は大きな反響を呼んだ。

受賞の言葉

今回の受賞で、私の地道な情報発信を見て、評価してくださる方がいらっしゃるのだとうれしく思いました。

私は協力隊時代、フィリピンのニュースや自分の活動を紹介する手書きの新聞「パル通信」を毎月つくり、日本の友人や世界に散らばる同期隊員たちにコピーを送っていました。この取り組みには、日本との文化の違いに戸惑ったり、活動がうまくいかなくて落ち込んだりすることがあっても、記事として書くことで自分が置かれた状況を客観的に見られるようになるというメリットもありました。今思えば、「書いて伝える」ということを積み重ね始めたのはその時期でした。帰国後に就職した日本ケロッグでも、広報用のニュースレターの制作に従事し、在職中、11年間で合計1305号をひとりで発行。「食品ロス問題」の情報を発信する今の仕事も、協力隊時代から続く習慣の延長にほかなりません。

「食品ロス」の削減については、「持続可能な開発目標（SDGs）」でも具体的な数値目標が盛り込まれています。世界共通のこの社会課題の解決に向け、今後も現場に足を運んで「書いて伝えていくこと」を続けていきたいと考えています。

TOPIC 2018 04

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会で協力隊OB・OGが活躍

2年後に迫った東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会。オールジャパン体制の中心となって大会の準備・運営に関する事業を担う公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（東京2020組織委員会）には、昨年から今年にかけて協力隊OB・OGたちが入職した。他国・他地域の国内オリンピック委員会（NOC）や国内パラリンピック委員会（NPC）との間の調整、あるいは言語ボランティアや選手団に付くボランティアの募集・育成などを所掌する「国際局」をはじめとする部署で、協力隊経験で培った語学力や異文化コミュニケーション能力などを発揮した活躍が期待されている。

2列目左から原浩治さん（ブルガリア・体育・1994年度1次隊、国際局国際渉外部言語サービス統括課所属）、高庄卓也さん（ニカラグア・都市計画・1998年度3次隊、大会運営局医療サービス部医療サービス課所属）、谷口晃親さん（エクアドル・水泳・2013年度1次隊、国際局NOC／NPC部NOC／NPCリレーションズ課所属）、1列目左から大串茉季さん（エルサルバドル・青少年活動・2013年度4次隊、同課所属）、増見知香さん（ドミニカ共和国・コミュニティ開発・2014年度2次隊、国際局NOC／NPC部NOC／NPCサービス課所属）、伊藤朱実さん（キルギス・PCインストラクター・2014年度2次隊、同課所属）

TOPIC 2018 05

歴代剣道隊員のカウンターパートが外務大臣表彰を受賞

日本と諸外国の友好親善に顕著な功績があった個人・団体を顕彰する外務大臣表彰。今年度は、1994年から6代にわたって剣道隊員が派遣されたブルガリア剣道連盟の会長、アレクサンダル・アラバジィスキさん（48）が受賞した。

1989年の東欧諸国の体制転換により、それまで禁止されていた空手以外の武道が自由に行えるようになってまもない時期に、アラバジィスキさんは首都ソフィアに道場を創設。93年には当時の会長らとともにブルガリア剣道連盟を立ち上げ、97年に会長に就任する。以来、今日まで同国の剣道界を牽引してきた。連盟の歩みに寄り添ってきた歴代の剣道隊員たちについて、アラバジィスキさんはこう振り返る。

「剣道における彼らの真摯な姿勢に、私たちは『感染』してきました。自分に問いを投げかけ、その答えを探る、あるいは目標を設定し、その達成に向けて努力する。そうした剣道の真正な精神こそ、彼らから学んだもっとも大切なものです」

昨年、東欧の剣士として初めて念願の七段を取得したアラバジィスキさん。「今後も、生涯剣道の稽古が続けられるよう健康に留意し、多くの若者に剣道の魅力を伝えていきたいと考えています」と抱負を語る。

ブルガリアの最後の剣道隊員、中澤雄飛さん（2006年度3次隊＝左端）の指導を受ける同国の剣士たち。左から2人目がアラバジィスキさん

特集

教育現場で働くOB・OGの活躍に注目

＼教員が語る／

教育現場でOB・OGが果たす役割とは

座談会

JICA海外協力隊の経験が今日の日本の学校現場でどのように生かせるのか、学校や子どもたちにどのような影響を与えられるのか。学校で働くJICA海外協力隊経験者たちに、ご自身の体験を踏まえながら意見交換をしていただきました。

梅本（司会） JICA海外協力隊の経験が、今日の日本の教育現場で日々どのように生きているのか。実践事例を振り返りながら、皆さんが感じられていることをお伺いできればと思い、教員として働く、働いていたOB・OG（以下、教員OV）にお集まりいただきました。まず、皆さんが現在のお仕事の中で協力隊経験を生かしている事例を教えていただけますでしょうか。

柚木園 私は現職教員特別参加制度を利用し、音楽隊員としてベリーズに派遣されました。この4月から職場に復帰し、横浜市の小学校で4年生の担任をしています。復帰して間もないため、具体的に協力隊活動を生かした取り組みはまだできていませんが、私自身の変化が子どもたちに影響を与えていると実感する場面が3つありました。

1つ目は、私自身が大らかになったことで、子どもたちの多様な個性を認められるようになったことです。ベリーズの人とかかわる中で、良いこともあった反面、嫌なことも少なくありませんでした。それらを乗り越えるために良い面を見ようと心がけることで、事態が好転することを実感しました。また、ベリーズは多民族が暮らす国。それぞれの文化を尊重するとはどういうことなのかも実感できました。それらの経験が自分を大らかにしたのだと思います。

2つ目は、これは保護者に指摘されて気づいたのですが、子どもたちに素直な愛情表現ができるようになったこと。現地の人や子どもたちが言ってくれる「I love you」やハグが嬉しくて、一緒に過ごすうちに自然と身についたのかもしれません。

3つ目は、子どもたちが世界に興味を持ってくれていると感じること。私がベリーズに行っていたことを知り、例えば社会科の学習中などに、「ベリーズではどうなの？」と子どもたちが聞いてきます。また、自分で題材を決めて調べる学習課題では、外国のことを調べてくる子どももいます。

谷田 私は6年前に現職教員特別参加制度を利用して、日系社会青年ボランティア（日系JV）の小学校教諭としてブラジルに派遣されました。派遣が決まった年に、ちょうどJICAの教師海外研修[*1]に参加していました。そのときに学んだ開発教育や国際理解教育を、学校現場に戻ったときに、どのように行おうかと考えながら活動していました。

帰国後、学年主任が、「総合的な学習の時間[*2]に、世界に目を向けるような内容にするアイデアを提案してほしい。他の学年でも経験

まるやまかずのり ● 1957年生まれ、兵庫県出身。79年に島根大学を卒業後、中学校教諭に。83年より3年間、香港日本人学校に勤務。89年4月、協力隊に現職参加。ホンジュラスで技術科教師として教員養成校で活動する。91年3月に帰国し、復職。パキスタン・カラチ日本人学校校長や兵庫県豊岡市立八代小学校校長などを務め、2017年に定年退職。現在は、兵庫県立兎和野高原野外教育センター所長、全国OV教員・教育研究会代表を務める。

かねたけんいち ● 1976年、千葉県生まれ。1999年、埼玉大学教育学部を卒業後、非常勤講師として埼玉県内の中学校に勤める。2000年12月、協力隊に参加。ケニアのマイアニセカンダリースクール（中等学校）にて、数学や物理の授業を担当し、生徒への指導に当たった。02年12月、帰国。その後、埼玉県の教員採用試験に合格し、12年間教諭として担任を務め、現在は埼玉県の小学校で主幹教諭を務める。全国OV教員・教育研究会事務局担当。

やつだなつみ ● 1982年生まれ、千葉県出身。2005年、玉川大学文学部教育学科を卒業後、講師を1年経験し、06年より千葉県の小学校教諭として勤務。11年、JICA教師海外研修にて開発教育、国際理解教育を学び、以後、実践を続ける。翌年、日系社会青年ボランティアとしてブラジルのアマゾン河口にある総合学園にて現地教諭と共に音楽の授業改善に取り組む。その他、日本文化を通しての青少年の育成、日伯協会の活性化を支援。14年3月、帰国。その後、小学校の現場にて国際理解教育を推進し、現在、千葉県長期研修生として国際理解教育の実践、研究に励んでいる。また、校種を越え、さまざまな場所でワークショップや出前講座などを実施している。

ゆのきぞのはるか ● 1987年、神奈川県生まれ。2010年に横浜国立大学教育人間科学部学校教育課程音楽教育専攻を卒業後、横浜市立小学校教員として学級担任、音楽専科を担当。16年3月、現職教員特別参加制度を利用して協力隊に参加。ベリーズ・オレンジウォークの大規模小学校にて、音楽の授業や教員へのワークショップ、課外音楽クラブの設立、指導等を行う。18年3月、帰国。4月より横浜市内の別の小学校に異動し、現在は4年生の学級担任をしている。

うめもとしんじ ● 1964年生まれ、北海道出身。青年海外協力隊事務局嘱託、ユネスコ・アジア文化センターなどを経て、95年JICA採用。青年海外協力隊事務局を皮切りに、地域部、課題部などに勤務。その後、セネガルやカメルーンなどフランス語圏アフリカを中心とした在外勤務を経て、2017年4月より現職。

*1 **教師海外研修**…国際理解・開発教育に関心を持つ教職員を対象に、国際協力の必要性に対する理解促進などを目的に、国内外で研修を行うJICAの事業。

*2 **総合的な学習の時間**…学習指導要領に定められた教育課程のひとつ。児童、生徒、また地域や学校の課題に応じて各学校で目標を定め、授業内容を決定する。

右上：協力隊時代の柚木園さん。課外活動で指導していたリコーダーグループの子どもたちと、任期終了直前の校内行事で最後の演奏を終えて　右下：現在担任をする学級での様子。道徳の授業で国際理解を扱ったときに、任地の民族の伝統衣装を紹介した様子

を生かして、授業を展開してみたら？」と実践の扉を開いてくれました。現在は、学校に籍を置きながら、千葉県長期研修生[*3]として国際理解教育を大学で研究し、実践しています。

金田　私は皆さんのように教員の立場で協力隊に参加したのではなく、大学を出てから1年間、臨時的任用教員として勤務後、協力隊に参加しました。現在は埼玉県の小学校で主幹教諭[*4]を務めています。帰国した年は、総合的な学習の時間が開始した年度です。最初の学校で「新しい先生、ケニアから来たんだって」と地域では話題になり、国際理解教育も実施でき、すぐに活躍の場が与えられました。

その後、教員採用試験に合格し、配属された学校では総合的な学習の時間のテーマのひとつが国際理解でした。担任する学級でケニアの話をしたり、6年生の社会科の教科書に青年海外協力隊が掲載されているので、話したりすることもありました。

丸山　昨年定年退職し、現在は兵庫県立兎和野高原野外教育センター所長を務めています。私がホンジュラスで学んだ1番のことは、これまで自分が受けた教育とは何だったのかを振り返れたことです。ホンジュラスの人が自分のふるさとを堂々と語る姿を見て、私は自分のふるさとを誇りに思えていないことに気づきました。「東京は立派だ、すごい」と父母や学校から教えられていたからです。

しかし、ふるさとは東京と比較するものではない、ホンジュラスの小さな村でそれを知りました。帰国したら、堂々とふるさとを語れる子が育つようにしたいと強く思い、それを実践できるよう、校長となり、学校全体で取り組める仕組みをつくりました。

派遣国で知る日本の教育

梅本　丸山さんのお話にあったように、他の3人は、自分が受けた教育と派遣国の教育を比べたとき、日本の教育はこうだったのか、と再認識したことはありませんか？

柚木園　ベリーズは家族が多いためか、子どもたち同士の教え合いが自然にできたり、細かい指示を与えなくても、自分で考え、気づき、行動できたりする良さがあると感じました。日本で私は、指示の方法や学び合いの場をつくるためにどうするべきかを考えてきましたが、ベリーズで、本来あるべき自然な姿を見せてもらったように思います。昔の日本も家族の強いつながりや助け合う気質など、ベリーズに似ていたのかもしれません。今、それが薄れているからこそ、細やかな支援が求められているのだということを実感し、また、より自然な姿に近づけていく必要があることにも気づきました。

谷田　ブラジルでは血縁のない家族は珍しくありません。多様な家族のあり方を認める文化だと感じました。今、日本の教育現場では、私の子どもの頃はあった「母の日」「父の日」などの行事を行わなくなってきています。家庭への配慮からですが、家族のあり方を認め、ひとりひとりが大切だと伝えていくことも大事だと思います。どんなことに配慮し、どんなことに重きを置いて教育していくか、議論を重ねていくことが必要だと思います。

金田　私が日本との違いを感じたのは教育のシステムです。今は違うかもしれませんが、私が派遣中のケニアでは、学習内容が多すぎて1年の授業の範囲が1年で終わらないことが普通でした。しかし、日本の学習指導要領に基づく教科書は1年間で授業ができるように計画されています。そして、日本では教科書が全員にいき渡ります。

ケニアでは、学習内容を精選するとか、教科書を全員に行き渡るようにするとか何か1点を変えるのではなく、教育のシステム全体を変えないと解決できない問題がある印象を受けました。そう感じたとき、日本の教育システムの良さに気づきました。

教育現場で直面する課題

梅本　協力隊経験を現場に還元する際には、課題や苦労などもあるのではないでしょうか。

柚木園　総合的な学習の時間の中で、国際理解教育を取り入れることの難しさを感じました。協力隊経験を伝えたい気持ちはありますが、どういう形で伝えるべきか。自分のクラスだけではなく、横を揃えないといけない。また学校のカリキュラム、縦の流れの中での位置づけや、継続できる取り組みにできるのかという問題もあります。

谷田　私も同じように国際理解教育を持続していくこと、発展させていくことの難しさを感じています。それは、多くの先生方が「国際理解教育をどう実践したらよいのかわからない、自信がない」という思いをもっているためです。実際に、県内の先生方にアンケートをとったところ、「国際理解教育を重要だと思っていても実践できていない。指導計画や教材・人材バンクがあれば実践しやすい」という回答が多く寄せられました。また、「あなたは外国で活動した経験があるから、できるのよ」などと、実践している人を特別視する傾向があり、なかなか積極的に取り組んでもらえないということもあります。

金田　私は現職参加ではないので、自ら発信しないと協力隊に参加していたことが周囲に伝わらないことです。また、経験をどう教育現場に生かすのかというときに、教員は基本的にカリキュラムにないことはできないという課題もあります。私の現在の勤務先の学校では、小学校の6年間で総合的な学習の時間のテーマとして、国際理解教育は入ってきません。国際理解教育を現場で実践できていない現状について、これでいいのかという気持ちは続いています。

梅本　私の経験ですが、社会科に興味を持ったときは、先生が郷土研究をしていた方だったので、話すことに奥行きがあり、先生を通して見える世界がありました。そういうことは、子どもの心に強く残るんですよね。そのように、まとまった時間で協力隊経験を話すというより、金田さんらしい授業運営、学校運営があるのではないかと思います。

金田　できない子が置かれている状況を想像できるようになるなど、他の人より想定の範囲を広く持てることは、学校運営に役立っているのかもしれません。そう考えられるようになったのは、ケニアに派遣直後の私が、授業も語学も料理も何もできない人間だったからです。私は2代目の隊員でしたが、1代目の隊員のことを現地の人が話すんです。「彼も来たときは、何もできなかった。私たちが教えたから、いろんなことができるようにな

右上：日系JV時代にブラジルの教師と一緒に民族楽器で幼稚園生へ授業を行う谷田さん
右下：長期研修の研究のため、小学校で研究授業を行う谷田さん。テーマは、「キャリア教育×国際理解教育」

＊3 **長期研修生**…教育委員会が実施する研修のひとつ。教育の充実を図るために高度な知識や技能を有する人材が必要であることから、これを育成するため大学などに教員を派遣する。
＊4 **主幹教諭**…学級担任を持たずに校長や副校長、教頭ら管理職を補佐する。

った。お前も今はできなくても、そのうちできるようになるよ」と。最初の3カ月はつきっきりでたくさんのことを教えてもらい、自立させてもらいました。

また、ケニアでは放課後に店番をする生徒や、弟や妹の面倒を見る生徒をよく目にしました。電気がないので、夜は家で勉強することは難しい。日本だと当然のように宿題がありますが、やってこない子がいたときに、その子が置かれている環境を理解しようと心がけるようになりました。

教員OVのネットワークを活用

梅本　全国の教員OVが交流し、開発途上国での活動経験を教育現場に生かすため、丸山さんは、2016年に全国OV教員・教育研究会を発足させました。この研究会についてご紹介いただけますか。

丸山　私は、協力隊と日本人学校、両方で活動しました。帰国後10年は、どう子どもたちに伝えていったらいいのか悩んでいましたが、相談する場はありませんでした。日本人学校には、40年以上前から各県の組織を束ねる全国組織があり、年に数回集まり、現地の情報の共有や、講習会などが開催されていました。しかし、協力隊にはそういう組織はなかった。ネットワークがあれば、派遣前の隊員に現地の様子や状況などの情報が共有できるだけでなく、帰国後、教員として情報の共有や悩みを相談できる場にもなる。ひとりで頑張って、悩んで、心を病んでしまう教員OVもいるので、ネットワークをつくることが自分たちを元気にするひとつの機会だと思い、12年前に地元兵庫県で教員OVが集まる組織を立ち上げ、3年前に全国の教員OVが集う組織を立ち上げました。

柚木園　隊員同士のつながりで元気をもらうというのはよくわかります。1次隊として入所した駒ヶ根訓練所で多くの他県の教員と知り合いました。今もお互いの状況や悩んでいることを話し、励まし合っています。

梅本　協力隊員のネットワークが心の拠り所でもあるんですね。2018年12月にはシンポジウムが開催されます（詳細は21ページ）。

丸山　今年の協力隊の合格通知は8月末に届き、訓練は来年の4月から。12月に集まることで、候補者が3学期に学校で準備できます。例えば日本の学校の掃除や給食の時間を写真に収めたり、理科の授業を動画で撮影していたりすると、現地で日本の様子を紹介するときなどの、資料となります。

谷田　出発前の情報共有は、派遣後にも、とても役立つと感じます。さらに帰国後も十分な事後研修が行われるといいと思います。自分の活動を報告し、現場でどう生かしていったらいいのかを話し合ったり、経験者から話を聴いたりすることも必要だと思います。

多様化する社会還元の方法

谷田　先ほど丸山さんより、心を痛めてしまう教員がいるという話がありました。私も帰国後1年は自分を肯定的に捉えられず、逆カルチャーショックの時期にいたと思います。

先生も社会還元の方法も多様であっていいと考えています。ここにいらっしゃる先生方のように、派遣中に学び得た子どもへの見方、接し方などを普段の教育活動で生かしていけばよいと思います。各々が、そのときどきの持ち場で、できることを最大化していくことでいいのではないでしょうか。

金田　今までのお話で、自身で定めた教育現場で実現したい目標に注力することが、還元事例につながると感じました。私は日本の理科教育を語れるようになることを目標に、毎月地元の理科の研究会に参加したり、筑波大学附属小学校に勉強しに行ったりしています。今は教科以外に組織を動かすシステムについて、隊員を経験したという、他の人とは違う立場から考えたいと思っており、いずれそれを教育現場へ還元したいと思っています。

今の若い教員の中には優秀である反面、できない子どもの気持ちに疎い人もいるように感じます。広い心を獲得するため、協力隊への参加を促せればと思っています。管理職になれば、教員研修の一環に協力隊の経験を取り入れるよう、訴えられるのではないかと考えています。

梅本　管理職のご経験がある丸山さんは、管理職だからできたと思うことはありますか。

丸山　基本、教育委員会に意見具申ができるのは、学校の中で校長だけです。その校長に協力隊や開発途上国とのつながりを大切に思える人材がいないと変えるきっかけすらつかめません。私は協力隊でふるさとの大切さを悟り、ふるさとを大切にする子どもを育てたいと、これを学校全体の取り組みにする仕組みをつくることができました。校長になったからこそできたと感じています。

教員OVは授業を持つ教師でいたいと言う人が多いですが、自分の目指す教育があり、それを広げ深めたいならば、管理職になるべきだと思います。

ゆっくり協力隊経験を生かしてほしい

梅本　皆さんの今後の目標をお願いします。

柚木園　まだ具体的なことは見えていませんが、子どもたちが世界のひとびとや、さまざまな文化に目を向けるきっかけになれたらと思っています。特に音楽教育を通して自分にできることを考えていきたいです。

谷田　私は「ESD (Education for Sustainable Development)：持続可能な開発のための教育」[*5]の必要性を理解してもらえるように、教育現場に働きかけていきたいです。そのときに、日系JVの活動で学んだ相互理解を大事にしたいです。現在、大学や出前講座などで、学生や教員志望の若者と話す機会があるので、そこでも働きかけ、次の世代を育てることにつなげていきたいです。

金田　管理職の立場となり、協力隊経験を生かしやすい環境を組織的につくっていきたいと思います。協力隊経験をキャリアや研修の場として機能するようなシステムのようなものを想像しています。今後、日本の教育にいろいろな立場でかかわり、その経験を生かし、将来また協力隊に参加したいですね。

梅本　最後に丸山さんから、協力隊のOB・OGへのメッセージをお願いします。

丸山　協力隊に参加した人はマイノリティになった経験があります。今、学校には多様な児童・生徒や保護者がいます。マイノリティの気持ちがわかる教員であることを認識し、自分もそうだったということを言える教員であってほしいと思います。

2年間の貴重な経験は、子どもたちを変える力を持っているので、焦らずにゆっくりと生かしてほしい。私たちはよく教員OVに次のように伝えています。「大根におでんの汁が染みるようにやってほしい。じっくり、こつこつやっていけば、本当に『いい味のある』子どもたちができますよ」と。

梅本　募集のキャッチフレーズ「いつか世界を変える力になる」のように、皆さんが少しずつ実施されている教育現場での活動が、世界を変える力につながるとお話を聞いて感じました。JICA青年海外協力隊事務局も全国OV教員・教育研究会の活動を後押ししていきたいと思います。本日はありがとうございました。

右上：協力隊時代の丸山さん。ホンジュラスで教員免許をもたない先生に風車をつくる講習会を行った　右下：2017年12月に京都で開催した第1回全国OV教員・教育研究シンポジウムで、途上国の経験を教育現場でどう生かせるのかを熱く語る丸山さん

右上：協力隊時代にケニアの学校でサイエンスショーを実施する金田さん
右下：埼玉県OB会の紹介で県内の高校で出前授業を行う様子。ケニアの民族衣装を持っていないため、当時の協力隊の制服を出前講座のユニフォームにしている

第二回 全国OV教員・教育研究シンポジウム

テーマ：「協力隊を日本の文化にする」
～途上国経験をSDGs時代の日本の教育に活かす～
日　時：2018年12月23日（日）10:30～
会　場：JICA関西
ねらい：途上国での人作り・国作りの経験を日本の教育の中で活かすため、全国の仲間が集い、多文化共生やグローカルといった視点で実践的な交流を行うと共に、これから派遣される教員に役立つ情報と元気を共有する。
内　容：基調講演　佐藤真久教授（東京都市大学環境学部）
実践発表　OV教員による国際理解教育実践
事前研修　派遣前・派遣中にすべきこと
主　催：全国OV教員・教育研究会、JICA
お問い合わせ先：JICA青年海外協力隊事務局人材育成課
jvtpc@jica.go.jp
TEL 03-5226-9323

＊5 **持続可能な開発のための教育**…持続可能な社会づくりの担い手を育む教育。

文部科学省担当者に伺う 教育現場で生きるOB・OGの力とは

学校教育の中で多様性の確保が課題となっている現在、JICA海外協力隊を経験した教員たちに期待される力とは何か。文部科学省の声をご紹介します。

インタビュー

話＝寺島史朗さん
文部科学省
大臣官房国際課
国際戦略企画室長

これから教育を受ける子どもたちが社会で活躍するとき、日本国内で日本人だけに囲まれて生きていくというのは、およそ現実的ではありません。ICTの発展により急速な情報化が進み、グローバル化により社会が多様化する時代の中で、どう寛容性を持ち、人と協力し、アイデンティティを保つか、学校教育もその流れの中にあります。

近年の教育改革により、学習指導要領が改訂され、2020年以降に順次全面実施されます。小学校では外国語活動や英語が導入され、また大学入試センター試験でも記述式問題が導入されるなど大きな変化があります。その教育改革の中で、特に習得を期待するのが「表現する力」「自ら課題を設定し、協働して解決していく力」などの「21世紀型スキル」です。

文部科学省でも、スーパーグローバルハイスクールの指定や留学生交流の推進などで、グローバル人材の育成に取り組んでいますが、21世紀型スキルをどう子どもたちに身につけてもらうのかは、課題のひとつでもあります。

現状として日本社会は流動性が低いという問題があります。私が以前タイの大使館に勤めていたときに感じたのは、陸続きの国であるタイでは民族も言語も入り混じっており、多様であることが当たり前だということでした。一方、国際的に見ても日本の学校は、多様性を受け入れるという変化に追いついていない。教員自身も、グローバル化は外国籍児童が多数いる学校など一部地域の課題と捉えている部分があります。全体の課題と認識してもらうためにも、積極的に海外を経験した教員を増やし、また教員が海外の知識や経験を獲得する場を増やしていかなければなりません。

そのような中、JICA海外協力隊を経験した教員（以下、教員OV）は、その経験を子どもや学校とシェアすることを帰国後の社会還元活動のひとつとしており、学校に多様性をもたらす存在であると感じています。

寺島史朗さん
文部科学省　大臣官房国際課
国際戦略企画室長

てらしましろう ● 1977年生まれ、富山県出身。2001年、文部科学省に入省。初等中等教育局勤務などを経て、2011年7月～2013年7月、宮城県教育委員会に出向。同教育委員会では、現職教員特別参加制度への派遣推薦も担当した。また2015年3月～2018年3月、在タイ日本大使館一等書記官。2018年4月より現職。日本型教育の海外展開や、アジア・アフリカ諸国をはじめとする各国との国際教育協力などに取り組む。

協力隊経験が生きる場とは

海外での経験は、教育現場でどのように生きてくるのか。活用には、2つの側面があると思います。ひとつは、経験そのものの価値を生かし、「経験を学校で子どもたちや同僚に伝えること」。もうひとつは、海外で教育観や授業力、自身の力、日本の教育を振り返る機会になったという教員OVの声を聞くように、「これまでの経験を客観的に見直したことで得る、新たな視点」です。文部科学省が実施するプロジェクトで、それを感じたことがあります。

文部科学省には、日本の教育を海外に紹介する「日本型教育の海外展開推進事業」という事業があります。その中で日本の大学が計画し、タイの日本人学校が協力をして、日本の教員が実施する「授業研究」*に、タイの教員に参加してもらうというプロジェクトがありました。教員の話、児童の発言のすべてを同時通訳する形で行いました。授業研究は、日本では近代学校制度が始まった約140年前から続けられており、日本の教員にとっては当たり前のもの。しかし、タイをはじめ多くの国では自分の授業を公開しません。これは、日本の教員には新鮮な驚きだったようです。タイには授業の質が上がらないという課題がありますが、授業研究の実施でタイの教員から直接「これはいい」と伝えられたことは、これまでの取り組みが正しかったと認識するきっかけになったようです。

教員OVも似たような経験をしているのだと思います。振り返りの経験、客観的な視点が、日本の教育の課題・良いところを見つけ、学校に新たな視点を与える。そして、自身の授業や子どもたちと触れ合う中でも、その経験が生きてくる。「総合的な学習の時間」などで経験を伝えたいのに、その機会がなかなか得られないと悩まれる教員OVもいるかもしれませんが、経験というものは直接的ではなくても日々の教育実践に滲み出てくるものであると思います。

「21世紀型スキル」は協力隊経験そのもの

協力隊の経験で得られるスキルとしてあげられるものは、自分とバックグラウンドが違う人と、言葉も文化も違う中で、状況を判断し、道を見つけ、課題を解決し、協調していく力。これはまさに、現在教員に求められる力であり、これから子どもたちに身につけて欲しい力、新しい学習指導要領が目指す先にあるものです。

現職教員特別参加制度の仕組みが変更になるなど転換期でもある今、人事を担当する教育委員会や現場である学校では、教員を海外に派遣するには苦しいこともあるかもしれません。しかし、長期的なビジョンを持ってグローバル化推進のリーダーとなる教員を育てるためにも、教員の協力隊への参加促進や、協力隊経験者の採用は価値のあるものだと感じています。すでに教員採用試験でJICA海外協力隊経験者の特別枠や特別選考を設けている都道府県もありますが、今後その動きがさらに広まってほしいと考えています。

そのためにも教員OVが、個人で、またネットワークを使って、協力隊経験を子どもたち、同僚などに地道に伝え続けてほしい。遠回りに感じるかもしれませんが、それが校長や教育委員会の理解につながり、次の教員OVを生み出し、日本の教育に多様な価値観を取り入れることにつながります。子どもたちが次の時代を「生きる力」を習得するためにも、教員OVや協力隊経験者の力、そして経験を発信する力に期待しています。

＊ **授業研究**…授業の質を向上させるため教員間で授業を公開し、議論する取り組み。

訓練所の今

協力隊OB・OGの青春が詰まった訓練所。ここでは、二本松青年海外協力隊訓練所と駒ヶ根青年海外協力隊訓練所のそれぞれの「今」を、現所長がご紹介。あわせて、候補生に馴染みの方や語学講師の方に、OB・OGへのメッセージをいただいた。

二本松青年海外協力隊訓練所の外観。
東日本大震災の発生時には、避難所として被災された方の受け入れも行った

Nihonmatsu Training Center

二本松青年海外協力隊訓練所

1994年度3次隊より派遣前訓練が開始されてから、およそ1万3千人の候補生を送り出してきた二本松青年海外協力隊訓練所。近年は、訓練に「フィールドワーク」などの新たなプログラムを導入し、地域との連携を深化させている。

訓練所のスタッフたち

帰国後の人生を切り開く力も

私が協力隊の任期を終え、広尾青年海外協力隊訓練所で業務に携わったのは30年ほど前になります。そのころから、候補生たちの「人のためになりたい」という強い熱意は今も変わりはありません。一方で、せっかく素晴らしい熱意を持っていても、自分の能力を発揮することを苦手とする若者が増えたという印象は否めません。これは非常にもったいない。ですから、訓練所の役目として、「候補生たちの潜在的能力を引き出すきっかけ」でありたいと考えています。

それに加え、「帰国後を見据える契機」をも提供したい。これは、私が訓練所長に就いた当初からの構想でした。それを形にしたのが、各種分野で活躍している方々を講師として招く講座です。任意参加の「自主講座」という位置づけにもかかわらず、候補生たちは熱心に耳を傾けています。

派遣国では想定外の事態が起こります。困難に直面したときに、「やらなくていい」という発想で済まさずに、「どう向き合えるのか」を考える。そこが肝心でしょう。そのためには「自発性」と「自律性」の強化が重要になります。昨今では、まさにそれらを鍛えるためのプログラムをつくることに注力しています。そのひとつが、2017年度から導入している「フィールドワーク」です。班ごとに二本松市内を歩いて調査し、地域の広報ツールを作成するという内容ですが、こちらが提示する課題は「二本松の魅力を発信すること」のみ。残りは候補生たちが主体となって企画しています。彼らが創意工夫して生み出した成果物は、地域の方々からも好評をいただいております。このように、今後も候補生が地域と関係を深め、彼らに帰国後、「また二本松を訪ねたい」と思ってもらえるような取り組みを続けていきたいと思います。

隊員の無事の帰国と二本松への再訪の願いを込めて訓練所内に設置された「無事カエル」

洲崎毅浩

二本松青年海外協力隊訓練所所長
すさき・たけひろ
2015年4月より現職。自身も協力隊経験者（ザンビア・公衆衛生・1987年度1次隊）。

エスタ先生の授業。教室の壁には手づくり教材が並ぶ

ASANTENI KWA MSAADA WENU.
みなさんのサポートに感謝しています

ESTHER S. KANOMATA

スワヒリ語講師
エスタ・サムエル・カノマタさん
タンザニア出身。協力隊発足まもない時期から派遣前訓練のスワヒリ語講師を務める。送り出した教え子は1000人以上にのぼる。

協力隊活動は「長い鎖」

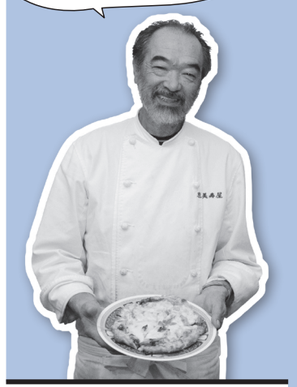
「候補生のスワヒリ語力向上のために、私はどんな手助けができるのだろうか」。そんな風によく考えます。隊員がスワヒリ語を話せば、現地の人たちは心を開き、おしゃべりに花が咲く。そうすれば、活動もずっと楽しくなるはずだからです。

OB・OGのみなさんとの思い出は数え切れません。たくさんの方から連絡をいただきますし、家族を連れて会いに来てくれる方もいます。帰国後、スワヒリ語が上手になっていることに驚かされることもあります。私の教え子同士が結婚し、その披露宴に招待していただいたときのこと、集まった多くの教え子たちがみなスワヒリ語で会話をするものだから、他の参列者が「いったい何語なんだ!?」と驚いたこともありましたね。東日本大震災の直後、私は一時的に大阪に移り住まなければなりませんでした。その際、話を聞きつけた近隣の教え子たちがグループをつくり、一緒に家を探したり、家具を調達したりと、さまざまなサポートをしてくれました。

数年前、派遣前訓練のプログラムでスワヒリ語話者の協力が必要となった際、仙台の大学でコンピュータについて学ぶタンザニア人留学生が引き受けてくれることになりました。当日、彼は私にこんな話をしてくれました。「実は論文の執筆で忙しかったけれど、JICAからの依頼だったので引き受けました。高校時代に数学を教わった隊員がすばらしい先生であり、彼の教えがあったからこそ私は大学に進むことができ、今の自分がある。その恩返しができるチャンスだと思ったからです」。恩師だという隊員の名前を尋ねると、なんと私の教え子でした！　その留学生は現在、母国の大学で教員を務めるまでになっています。

隊員が何を成し遂げたのかは、しばしばわかりづらいものです。発展というのは長い鎖であり、それを辿っていって初めてその姿が見えてくるからです。今お話ししたタンザニア人留学生の恩師も、協力隊時代に自分がどれだけ役に立っているのかはわからなかったでしょう。しかし彼の道は、タンザニア人留学生の成長という形で今もなお続いているわけです。このことをぜひ、OB・OGの皆さんにお伝えしたいです。

いつでもお待ちしています。



大円次雄

恵美寿屋（えびすや）マスター
おおうち・つぎおさん
1977年から岳温泉で恵美寿屋を経営。看板メニューの手づくりピザは、開店当初から変わらない味を守っている。

思い出の置き場所として

当店と協力隊の関係は、二本松訓練所ができた22年ほど前に遡ります。当時の岳温泉では、うちを含めて飲食店は3店舗。候補生たちが食事に来てくれたことをきっかけに交流が始まりました。そのなかで、3つの言葉をよく耳にしてきました。まずひとつが、訓練開始当初の「2カ月間か、長いなぁ」。次が退所式後の「終わっちゃったなぁ」。最後に「あのときは楽しかったなぁ」という帰国後の言葉です。お心当たりはないでしょうか。店にやって来る候補生たちは、さまざまな顔を見せてくれます。家族と離れることへの寂しさに涙する青年、三味線を片手に『島人ぬ宝』を2時間続けて大熱唱していた九州・沖縄出身者の集い、そして二本松イリュージョンという恋愛模様も。近くで若者の等身大を見つめ、応援できることは、店を続けるやりがいです。

約400人。この数は、「ただいま」といって店に帰ってきてくれたOB・OGの数です。結婚の報告をしに来てくれたのは8組。なかにはOB・OG同士の結婚式の2次会を店で開いてくれたこともありました。

マスターの似顔絵がトレードマークの店舗外観

しかし、人数を数えるのは東日本大震災を機に止めました。震災発生後、心配してくれたOB・OGの方々が入れ替わり立ち替わり様子を見に来てくださるようになり、数えきれなくなったためです。実は、震災の被害を受け、店を畳むことを考えた時期もありました。しかし、「店を続けてください。候補生やOB・OGも喜んで来ますから」と、OB・OGの方たちが言ってくれた。その言葉が再開する後押しとなりました。

店内には、訓練中の写真や寄せ書きを飾っています。もちろん、現在も更新中。皆さんは、帰国後にここに戻って来て、当時の自分や仲間の姿があればうれしく思うのではないでしょうか。店は思い出の置き場所なのです。ぜひ、あのころの思い出を巡りに、岳温泉に遊びに来てくださいね。

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所の外観。2017年度2次隊で修了者数の累計が2万人を突破した

Komagane Training Center

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

2019年5月には「開設40周年」を迎える駒ヶ根青年海外協力隊訓練所。派遣前訓練に「地域実戦」のプログラムを導入するなど、地域とのつながりをますます深めている。

語学講師と訓練所のスタッフたち

新たな始まりを応援する場所に

清水 勉

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所所長
しみず・つとむ
2016年4月より現職。自身も協力隊経験者（ネパール・植物学・1988年度2次隊）。

今年度、派遣前訓練に新たに「協力活動（地域実践）」を導入しました。座学では得られない実践的なスキルを養うことを目的に、地域で活動する様々な団体に候補生が出向いて、インタビューや話し合いを通じて共に課題を解決したり新たな取り組みを提案したりするものです。例えば公民館では「高校生と高齢者が『写真』の撮り方や『SNS』の発信を通じて交流する」という世代間交流と観光振興の新講座を提案したり、引きこもりやニートを支援する団体では「引きこもりの方を支援するつもりで行ったが彼らの姿勢に励まされた」という候補生の感想が出たり、協力隊活動のシミュレーションとして本講座が対人スキルの向上に繋がることを狙っています。そして候補生と市民が相互に理解を深め、さらには地域の活性化にも貢献することを期待しています。

訓練所としては隊員の皆さんが派遣国で元気に充実した活動をしてくれることが一番の願いですが、帰国後のOB・OGとの再会も嬉しいものです。

協力隊発足50周年を機に「信州駒ヶ根ハーフマラソン大会」に協力隊経験者枠を設けていただき、派遣時期も年齢も様々なOB・OGがそれぞれの派遣国の国旗を背中に背負って走っている姿を見ると、一人ひとりの人生にとって協力隊経験が大きな財産であることを実感します。

つい先日も、訓練中に仲間と埋めたタイムカプセルを掘り起こしに帰ってきた隊次がありました。これからの駒ヶ根訓練所は、JICA海外協力隊員の出発点であるだけでなく、OB・OGの再会や新たな取り組みを応援する場所でもありたいと思います。皆さん、いつでも訓練所に戻ってきてください。

2018年度3次隊のSVの修了式の様子

協力隊の慰霊碑「友よやすらかに」

広尾訓練所の今

広尾青年海外協力隊訓練所は1968年に開所され、2005年まで派遣前訓練が行われていましたが、2006年、JICA地球ひろばの開設に伴い閉所となりました。現在は、1982年に建立された慰霊碑の区画のみ分割、保存されており、その他の土地建物は聖心女子大学の所有となりました。

日系社会ボランティアの訓練の今

長らくJICA横浜で実施されていた日系社会ボランティアの派遣前訓練は、2017年度より、スペイン語圏に派遣される隊員のみ駒ヶ根訓練所に場所が移りました。ブラジルに派遣される隊員も2019年度より駒ヶ根での訓練となります。

訓練所の今

高坂 保

駒ヶ根協力隊を育てる会名誉会長
こうさか・たもつさん
元駒ヶ根市教育長、元青年海外協力隊駒ヶ根訓練所カウンセラー

派遣前訓練は「変革の時期」

候補生との関係が深化したのは、1995年より「訓練カウンセラー」の職をお引き受けしたのがひとつのきっかけです。彼らの悩みや不安を共に解決し、派遣国へ送り出すという役目なのですが、8年間の任期で実に600人以上から相談を受けました。家族や人間関係、なかには「駒ヶ根マジック」に関する相談もありましたね。一方で、訓練や仲間との出会いを通じて意識が変化していく候補生たちの姿を目の当たりにしてきました。訓練所は、まさに若者の「変革の時期」なのです。

私が隊員の活動現場を視察に訪れたのは、20年ほど前のことです。そのとき、さまざまな困難に直面しながらも、創造性やボランティア精神を持って活動する隊員たちの姿に感銘を受けました。派遣国での活動はたやすいことではありませんが、夢を抱き、問題を解決する努力を続けたときに、必ず道は開けるのだと感じました。その経験から、「辛苦のときこそ、道ひらく」という言葉を染め抜いた手拭いを、2012年度1次隊より、候補生に贈り始めました。手拭いはケガをしたときの応急処置にも有効ですが、そのように使用することなく健康に過ごしてほしい。苦しいときは汗を拭き、ねじりハチマキにして奮起してほしい。そんな思いを込めています。私が訓練の修了式で挨拶をしていたころは、実際にねじりハチマキをしてみせたものです。

訓練の修了後、みなさんから届いた300通を超える手紙や、派遣国の紹介が盛り込まれた通信は、今も大切に保管しています。それらから、皆さんの活躍を窺がえるのは大変喜ばしいことです。OB・OGのみなさんには、協力隊で得た経験を、自ら進んで社会や教育現場に還元していただきたい。協力隊を経験した皆さんであれば、「道をひらく力」が備えられているのですから。

देवेन्द्र साया मी

ネパール語講師
デヴェンドラ・サヤミさん
ネパール出身。1984年より派遣前訓練のネパール語講師を務める。送り出した教え子は1000人以上にのぼる。

教え子たちは私の家族

トマトとタマネギと卵を渡されたら、何をつくりますか？　おそらく多くの方が「オムレツ」と答えるでしょう。ですが、答えはオムレツだけではないはずです。人間には、考える力、工夫する力、拡張する力が備わっている。それらがあれば、オムレツ以外の立派なレシピを考え出すこともできるでしょう。私がネパール語の指導で基本としてきたのは、候補生たちが持つこれらの力を削がないようにすることです。つまり、単語などの「食材」は提供するけれども、それを使ってある表現へと組み立てる「レシピ」は、生徒自身に考えてもらう。「覚えること」に終始するあまり、「想像すること」がおろそかになることのないよう、「この単語を覚えてきなさい」ということも言わない。言わば、私がやっているのは「サポート」であって、「教えること」ではありません。

多くのOB・OGから、よく連絡をいただきます。そのようなときに私がこだわっているのは、彼らとネパール語で会話することです。「現地の人と共に汗を流し、同じ釜の飯を食べる」というのが協力隊のモットーですが、帰国後、現地の人たちに連絡したときに、言語力の衰えのせいで相手が話していることを理解できなくなってしまっていたら、きっと残念な気持ちになりますよね。皆さんにはそうなってほしくないのです。

現在訓練中の20-8年度3次隊は、私にとって104番目の隊次になります。教え子の人数は1000人を超えるでしょう。それでも私は、これまで教えてきたすべての候補生たちを覚えている自信があります。というのも、候補生には家族のように接しているのですが、そうするなかで深いつながりができていくと感じているからです。ですから、私が元気なうちに（笑）、また遊びにきてください。ネパール語で思い出を語らいましょう。

ネパール語の授業の様子。教室には歴代の候補生が残した写真やパネルなども飾られている

複 選択式・複数回答可
選 選択式
自 自由記述式

JICA海外協力隊
OB・OGに聞きました

帰国後10年アンケート

派遣国からの帰国後、OB・OGはどれほど「協力隊経験」とのつながりや影響を持ち続けているのだろうか。そこで、「帰国後10年（2006年度派遣）」のOB・OGを対象に、帰国から現在までの状況を尋ねるアンケート調査を実施。220人の結果を集計し、発表する。

※パーセントの数値は少数第1位を四捨五入しています。

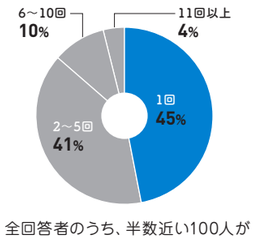
PART 1 つながり編

Q1 任期終了後の派遣国とのかかわりは？ 複

- 1位 派遣国に関するニュースを思わず見てしまう（185人）
- 2位 当時のCPや友人・知人と付き合いがある（148人）
- 3位 派遣国の言語を使うときがある（118人）
- 4位 派遣国へ再渡航した（100人）
- 5位 派遣国に関する夢をときどき見る（50人）

4％（10人）の方の結婚相手が、派遣国出身という結果に！
また、「Google Earthで散歩する」という回答も。

派遣国への再渡航回数内訳



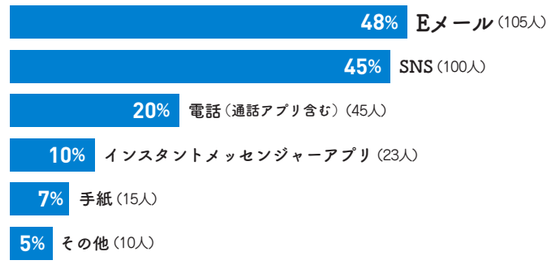
全回答者のうち、半数近い100人が1度は派遣国を訪れている！

Q2 再渡航した感想は？ 複

- 1位 CPや同僚たちと再会できてうれしかった（78人）
- 2位 友人と再会できてうれしかった（77人）
- 3位 現地料理を食べることができた（69人）

「現地の料理を食べることができた」が堂々の3位に！
胃袋を掴まれた方が多いのでは？「結婚相手と子どもをホストファミリーに紹介できた」という声も。

Q3 当時のCPや友人・知人たちとの連絡手段は？ 複



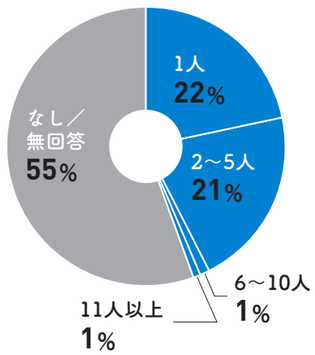
帰国後にSNS上で関係者と再会された方も多いのではないでしょうか。

Q4 JICAボランティア事業やその他の国際協力事業とのかかわりは？ 複

- 1位 同期隊員やその他OB・OGとの付き合い（149人）
- 2位 OB・OG会に参加（53人）
- 3位 国際協力イベントに参加（45人）

30人からは、「訓練所を再訪した」という回答が得られました。

Q5 ご自身の影響で協力隊に参加したと思われる方の人数は？ 選



回答者の半数近くが、新たな協力隊を生み出している結果となりました。

PART 2 経験の活用編

Q6 協力隊へ参加したことを肯定的に捉えられていますか？ 選

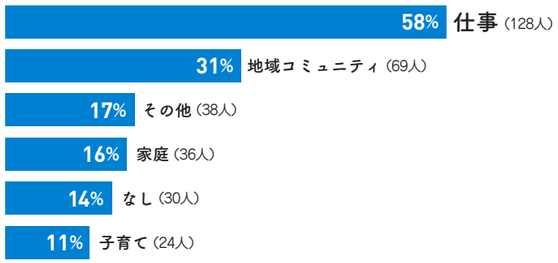
全体の約98％の方が肯定的に捉えているという結果となりました。

Q7 帰国後、派遣中に培った語学力を発揮する機会は？ 複

- 1位 旅行で（95人）
- 2位 仕事で（67人）
- 3位 友人と（62人）
- 3位 街中で（道案内やお店など）（62人）
- 5位 国際交流イベントで（61人）

ボランティア活動や、派遣国からの留学生のホームステイ受け入れに発揮されている方も。

Q8 帰国後、協力隊の経験を生かせていると感じる（た）場面は？ 複



「日々の生活全般！」という声も多数ありました。

Q9 協力隊の経験で培ったご自身の強みは？ 自

- 1位 適応力
- 2位 新たな価値観
- 3位 他者（異文化）理解
- 4位 寛容性
- 5位 自信

なかには、こんな自信を持っている方も。
- どんなところでも生きていけます！
- どんな物でも食べられるようになりました！

Q10 10年経っても「あぁ、やっぱり自分は協力隊OB・OGだな」と思う瞬間は？ 自

- 協力隊OB・OGと知ると、急に親しみがわく
- 散歩するとき、目についた道端のゴミをレジ袋で拾うようにしている
- 派遣国の人に似た外国人を見かけると、声をかけたくなる
- 派遣国の良いニュースを見ると、うれしくてたまらない
- あまり清潔ではないところも平気です

PART 3 エピソード編

Q11 いまだに抜けない派遣国や隊員時代の癖や習慣は？ 自

- 派遣国で食べていたキャッサバの味が忘れられず、販売している店から取り寄せている
- 固形石鹸で体だけでなく、髪も洗うこと
- 驚くときのリアクションで、ヒーと息を吸う癖が日本語の会話でも出てしまう
- ティッシュペーパーを最小限に抑え、他人が無造作に使うと気になる
- 左手でものは渡さない
- 気分が落ち込んだら、現地料理（羊や牛肉の串焼き）を食べて、元気を出すこと

アンケート実施概要

- 時期：2018年10月下旬～11月上旬
- 対象：2006年度派遣の協力隊
- 回答者数：220人
  （JV＝109、SV＝104、NJV＝1、NSV＝6）
- 方法：質問紙法（選択式と自由記述式の併用）
- 実施者：青年海外協力隊事務局　人材育成課

JICA海外協力隊 OB・OG会

「在住地」や「派遣国」など、共通項で結ばれたJICA海外協力隊経験者で構成するOB・OG会。その最新の基礎情報（2018年11月現在）をまとめました。

在住地等別 | 同じ都道府県・市の在住者や出身者などで構成するOB・OG会

地域	県名等	団体名	代表者	問い合わせ窓口
北海道・東北	北海道	青年海外協力隊北海道OB会	原田晴子（チリ・歯科衛生士・2008年度1次隊）	b94110@nifty.com（吉田勉幸）
	青森県	青森県青年海外協力協会	中村信行（バングラデシュ・電子機器・1989年度3次隊）	cqt00243@nifty.com（中村信行）
	岩手県	岩手県青年海外協力協会	菊池真美子（ボリビア・理学療法士・2013年度2次隊）	t-kan@live.jp（事務局：菅 智美）
	宮城県	宮城青年海外協力協会	川島孝志（ボリビア・自動車整備・1994年度3次隊）	miyagi.jocv.ov@gmail.com
	秋田県	青年海外協力隊秋田県OB会	打矢佳彦（マラウイ・理数科教師・2005年度2次隊）	https://www.facebook.com/jocv.akita
	山形県	NPO法人山形県青年海外協力協会（YOCA）	槙 正智（バヌアツ・小学校教諭・2001年度2次隊）	yamagatayoca@yahoo.co.jp（槙 正智、大内真里生）
	福島県	ふくしま青年海外協力隊の会	吉田淳平（ルワンダ・食品加工・2011年度1次隊）	fukushima.jocv@gmail.com（伊東瑞歩）
関東・甲信越	茨城県	青年海外協力隊茨城県OV会	大橋 暁（モロッコ・測量・1990年度3次隊）	ov_yakuin@freeml.com
	栃木県	栃木県青年海外協力隊OB会	渡邉篤史（ソロモン・理数科教師・2008年度1次隊）	tochigi.ov@gmail.com（渡邉篤史）
	群馬県	青年海外協力隊群馬県OB会	當銀譲次（ガーナ・電気機器・1985年度2次隊）	gunma_jocv@yahoo.co.jp（山口 朗）
	埼玉県	青年海外協力隊埼玉県OB会	榎本 敬（タンザニア・土木施工・1994年度1次隊）	saiobkumeda@aol.com（粂田 浩）
	千葉県	青年海外協力隊千葉OB会	浜田眞一（ケニア・測量・1976年度2次隊前期）	info@jocvchiba.net（小山、浜田）
	東京都	青年海外協力隊東京OB会	野村一成（マラウイ・養鶏・1978年度2次隊前期）	nomura@asahishokuhin.co.jp（野村一成）
	新潟県	新潟県青年海外協力協会	渡部 悟（ミクロネシア・土木・1992年度2次隊）	sasnwatabe@yahoo.co.jp（渡部 悟）
	神奈川県	青年海外協力隊神奈川県OB会	小島海治（トンガ・音楽・1998年度1次隊）	info@kocv.jp（小島海治）
	川崎市	川崎JICAボランティアの会	内藤幸彦（エチオピア・天然痘監視員・1972年度1次隊）	fvgp7530@nifty.com（内藤幸彦）
	山梨県	山梨青年海外協力隊協会	船木良彦（ニカラグア・養護・1999年度3次隊）	k88ne23k@nifty.com（船木良彦）
	長野県	青年海外協力隊長野県OB会	杉田威志（ガーナ・理数科教師・2003年度2次隊）	info@nagano-jocv.com（杉田威志）
東海・北陸	富山県	青年海外協力隊富山県OB会	井上純子（日系JV／パラグアイ・日系日本語学校教師・2001年度派遣）	info@jocv-toyama.jp（井上純子）
	石川県	石川県青年海外協力隊OB会	宮薗達朗（ホンジュラス・水産物加工・1982年度3次隊）	goto1016@hotmail.com（後藤善久）
	福井県	青年海外協力隊福井県OB会	林 宏征（ニジェール・村落開発普及員・2008年度2次隊）	jocvfukui@gmail.com（事務局：白崎則子）
	静岡県	青年海外協力隊静岡県OB会	佐藤健太（マラウイ・青少年活動・2005年度2次隊）	exjocv.shizuoka@gmail.com（佐藤健太）
	岐阜県	JICAボランティア岐阜県OV会	田中 勲（ボリビア・青少年活動・2008年度4次隊）	isao54tnk@gmail.com（田中 勲）
	愛知県	青年海外協力隊愛知県OB会	稲垣佳成（フィリピン・村落開発普及員・1989年度3次隊）	jocvaichiob@yahoo.co.jp（久住俊明）
	三重県	青年海外協力隊三重県OB会	竹尾敬三（ケニア・稲作・1977年度2次隊前期）	takeo331@assp.jp（竹尾敬三）
近畿	滋賀県	滋賀県青年海外協力協会（SOCA）	左近健一郎（ネパール・理数科教師・1990年度1次隊）	r.matsu@nifty.com（松村良司）
	京都府	NPO法人京都海外協力協会	坂根 均（スリランカ・自動車整備・1984年度3次隊）	office@koca.or.jp（坂根 均、笘廣啓史、鎌田美保）
	大阪府	青年海外協力隊大阪府OB・OG会	高森 靖（スリランカ・環境教育・2009年度4次隊）	osakaov@gmail.com
	兵庫県	青年海外協力隊兵庫県OB会	阪井園子（カンボジア・小学校教諭・2007年度1次隊）	tbanfreeway1738@gmail.com（伴 忠道）
	奈良県	奈良県青年海外協力協会	小尾二郎（ネパール・理数科教師・1983年度3次隊）	jkobi@m5.kcn.ne.jp（小尾二郎）
	和歌山県	和歌山青年海外協力協会	談儀善弘（ネパール・理数科教師・1983年度1次隊）	dangiyhojp@yahoo.co.jp（談儀善弘）
中国・四国	鳥取県	青年海外協力隊鳥取県OV会	谷田孝之（ニジェール・小学校教諭・2000年度1次隊）	issaissa@jt2.so-net.ne.jp（谷田孝之）
	島根県	島根県青年海外協力協会	天津貴志（ブルキナファソ・村落開発普及員・2003年度1次隊）	shimanejocvov@gmail.com（天津貴志）
	岡山県	青年海外協力隊岡山県OV会	近藤英生（モロッコ・測量・1981年度3次隊 ）	https://www.facebook.com/ov.okayama
	広島県	青年海外協力隊広島県OB会	竹内英祐（ウガンダ・土木・2008年度4次隊）	info@jocv-hiroshima.sakura.ne.jp
	山口県	青年海外協力隊山口県OB会	山尾和宏（インド・日本語教師・2010年度4次隊）	valencia0522@gmail.com（山尾和宏）
	徳島県	徳島県青年海外協力協会	中村晃一（フィリピン・溶接・2004年度3次隊）	koittyann@yahoo.co.jp（中村晃一）
	香川県	香川県青年海外協力協会	三宅康仁（ホンジュラス・小学校教諭・2011年度1次隊）	sykbp872@yahoo.co.jp（三宅康仁）
	愛媛県	愛媛県青年海外協力協会	保積 亮（旧姓：門田／ルワンダ・理数科教師・2011年度1次隊）	weifan217@gmail.com
	高知県	高知県青年海外協力隊OB会	猪野孔太（南アフリカ共和国・電気・電子設備・2011年度1次隊）	jocv_ob_kochi@yahoo.co.jp（猪野孔太）
九州・沖縄	福岡県	福岡県青年海外協力協会	小田哲也（コロンビア・青少年活動・1997年度1次隊）	jocvfukuokakenov@gmail.com（齊藤ちづる）
	佐賀県	佐賀県海外協力協会	鶴田さゆり（中華人民共和国・幼児教育・2009年度2次隊）	xiaoli_0102@yahoo.co.jp（鶴田さゆり）
	長崎県	長崎県青年海外協力協会	井手 哲（ニカラグア・都市計画・2004年度1次隊）	jocanagasaki@gmail.com（井手 哲）
	熊本県	熊本県青年海外協力協会	山本一憲（ボリビア・農業土木・2011年度1次隊）	jocakumamoto2014@gmail.com（山本一憲）
	大分県	大分県青年海外協力協会	鈴木 馨（タンザニア・電話交換機・1986年度2次隊）	upepo777@yahoo.co.jp（鈴木 馨）
	宮崎県	宮崎県海外協力協会	清武信彦（ベトナム・家畜飼育・2007年度1次隊）	prometheus1@hotmail.co.jp（清武信彦）
	鹿児島県	青年海外協力隊鹿児島県OB会	古田宣稔（タンザニア・土木・1984年度3次隊）	furuta@hasigutigumi.com（古田宣稔）
	沖縄県	沖縄県青年海外協力協会	神田 青（ラオス・青少年活動・2012年度1次隊）	okinawajoca@gmail.com（金城雄太）

出身校別 | 出身校が同じJICA海外協力隊経験者などで構成するOB・OG会

種類	出身校	団体名	代表者	問い合わせ窓口
大学・短大	酪農学園（大学・短期大学）	酪農学園青年海外協力隊OV会	南 繁（タンザニア・獣医師・1976年度1次隊後期）	gaia373@gmail.com（南 繁）

派遣国別 | 派遣国が同じJICA海外協力隊経験者などで構成するOB・OG会

地域	派遣国	団体名	代表者	問い合わせ窓口
アジア	スリランカ	スリランカ同窓ネットワーク	市川真理子（コンピュータ技術・1987年度3次隊）	ichi_mariko@yahoo.co.jp（市川真理子）
	中華人民共和国	青年海外協力隊中国同志会	羽田一三男（自動車整備・1988年度3次隊）	nihao.haneda@nifty.com（羽田一三男）
	ネパール	青年海外協力隊ネパール会	田中浩平（食用作物・稲作・1992年度1次隊）	nepalkai@chautara-kaze.com（田中、上坂）
	バングラデシュ	バングラデシュOVの会	佐藤利哉（農業協同組合・1981年度1次隊）	nahoko@sol.dti.ne.jp（佐藤利哉）
	フィリピン	協力隊フィリピンOB/OG会	中垣長睦（園芸作物・1970年度2次隊）	jocvph-obog-admin@googlegroups.com（上村秀之）
	ベトナム	ベトナムOV会	青木宏祐（空手道・2004年度3次隊）	kakuchari@yahoo.co.jp（青木宏祐）
	マレーシア	青年海外協力隊マレーシア会	白山 肇（理数科教師・1980年度1次隊）	malaysia@ics-together.com（志岐文子）
	ラオス	青年海外協力隊ラオスOV会	北村裕介（コンピュータ技術・2010年度2次隊）	yk08072002@gmail.com（北村裕介）
大洋州	サモア	青年海外協力隊サモアOB会	大塚一雄（コンピュータ技術・1988年度3次隊）	samoa@fafetai.net
	ソロモン	JOCV・ソロモンOV会	山本真紀（公衆衛生・1994年度2次隊）	kima_honiara@i.softbank.jp（山本真紀）
中南米	エクアドル	エクアドルOV会	岡山倫也（環境教育・2014年度3次隊）	ecuador.exvoluntarios@gmail.com
	エルサルバドル	青年海外協力隊エル・サルバドル会	高田幸一（バスケットボール・1976年度1次隊前期）	ichi0704@jcom.home.ne.jp（高田幸一）
	エルサルバドル	エルサルバドルのパラアスリートを応援する会	高田幸一（バスケットボール・1976年度1次隊前期）	miyahei@hotmail.com（宮本亮平）
	ドミニカ共和国	ドミニカ共和国OV会	綿引純男（体育・1988年度2次隊）	sumiowatahiki@hotmail.com（綿引純男）
	パナマ	青年海外協力隊パナマOV会	立花邦彦（電子機器・1993年度1次隊）	panamaov@yahoo.co.jp（吉岡初子）
アフリカ	エチオピア	青年海外協力隊エチオピアOB・OG会	並木義明（電話線路・1974年度2次隊前期）	namiki.yoshiaki@mirait.co.jp（並木義明）
	ケニア	協力隊ケニアOB・OG会	倉科芳朗（理数科教師・1988年度2次隊）	kenya_exjocv@googlegroups.com（川田直輝）
	ジンバブエ	ジンバブエOV会	鏑木 潔（コンピュータ技術・2004年度2次隊）	kab.san.diver@gmail.com（鏑木 潔）
	タンザニア	ワスワヒリの会	蔀 佳恵（村落開発普及員・2008年度3次隊）	waswahilinokai@gmail.com
	ニジェール	ニジェール有志の会	大野岳夫（コンピュータ技術・2004年度1次隊）	takeo.ohno@nifty.ne.jp（大野岳夫）
	マラウイ	日本マラウイ協会	野呂元良（元在マラウイ日本国大使）	info@japan-malawi.org（側嶋康博）
	モザンビーク	モザンビークの会	中岡英代（理数科教師・2007年度2次隊）	mozambique.no.kai@gmail.com（中岡英代）
	ルワンダ	青年海外協力隊ルワンダOV会	松山匡延（理数科教師・2005年度3次隊）	rwandaov@yahoo.co.jp（松山匡延）
中東	イエメンほか	JOCV イエメン＋UNV ネットワーク	相場由夏（旧姓：佐藤／幼児教育・2007年度2次隊） 伊藤嘉一（UNV経験者〈イエメン・1971年〉）	meguro-ito@t02.itscom.net（伊藤嘉一）
	シリア	シリアOV会	中村聡武（音楽・1999年度3次隊）	toshitakenakamura@hotmail.com（中村聡武）
	ヨルダン	ヨルダンネットワーク	小田賢治（編集・2000年度1次隊）	jordan-network-yakuin@googlegroups.com （小田賢治）
欧州	ブルガリア	ハイデベ ブルガリア	原 浩治（体育・1994年度1次隊）	yusukeaznable@gmail.com（岡田裕介）
	ルーマニア	ルーマニアOB会	増田美智世（旧姓：斗澤／看護師・1997年度3次隊）	jocvrom-admin@googlegroups.com

分野等別 | 派遣中・帰国後の職種・活動領域などが同じJICA海外協力隊経験者などで構成するOB・OG会

分野（大）	分野（小）	団体名	代表者	問い合わせ窓口
建築	都市計画・建築	NPO法人都市計画・建築関連OVの会	設楽知弘（株式会社毛利建築設計事務所）	evaa.jocv@gmail.com（設楽知弘）
保健衛生	リハビリテーション	JOCVリハビリテーションネットワーク	町田 和（旧姓：三浦／パキスタン・理学療法士・2005年度2次隊）	jocvrehabnetwork@gmail.com（石井清志）
	栄養士	青年海外協力隊栄養士ネットワーク	草間かおる（マラウイ・栄養士・1997年度2次隊）	kusama.kaoru@u-nagano.ac.jp（草間かおる）
	看護職	JOCV看護職ネットワーク	成瀬和子（フィジー・看護師・1990年度2次隊）	jocvnurse@gmail.com
教育	幼児教育	青年海外協力隊幼児教育ネットワーク	鶴見志織（スリランカ・幼稚園教諭・1999年度2次隊）	JOCVyoukyou@aol.com
	開発教育	開発教育を考える会	臼井香里（エルサルバドル・美術・1974年度2次隊後期）	chikyu-nakama@jcom.zap.ne.jp（天野和広）
	開発教育	学校から世界のミカタを考える会	糀 広大（ミクロネシア・小学校教諭・2011年度1次隊）	info@sekainomikata.com（糀 広大）
	理数科教育	ザンビア理数科教師会議（AMAKASA）	瀬戸洋一（ザンビア・理数科教師・1997年度1次隊）	Aoki.Hidetake@jica.go.jp（青木英剛）
	環境教育	青年海外協力隊環境教育OV会	加藤超大（ヨルダン・環境教育・2012年度1次隊）	see.jocv@hotmail.com（加藤超大）
	学校教育	全国OV教員・教育研究会	丸山一則（ホンジュラス・技術科教師・1988年度3次隊）	mwalimu@nifty.com（金田健一）
	学校教育	関東教育支援ネットワーク	金田健一（ケニア・理数科教師・2000年度2次隊）	mwalimu@nifty.com（金田健一）
	学校教育	京都府OV教員研究会	貝畑四朗（ジンバブエ・体育・2006年度3次隊ほか）	masahirak0212@yahoo.co.jp（川村昌広）
	学校教育	青年海外協力隊大阪府OB・OG教育ネットワーク	三野光雄（ウガンダ・理数科教師・2002年度1次隊）	mituwo.sanno@nifty.com（三野光雄）
	学校教育	兵庫OV教員研究会	山崎 丈（ガーナ・理数科教師・1990年度1次隊）	m-kazu40@mvj.biglobe.ne.jp（事務局：丸山一則）
スポーツ	柔道	青年海外協力隊柔道隊員OB・OG会	貞森 裕（シリア・柔道・1969年度2次隊）	rsf37824@nifty.com（田中耕三）
	バレー	JOCVバレーボール会	三枝大地（チリ・バレーボール・2004年度3次隊）	samuraihop@hotmail.com（中島太一）
その他	無線	JOCV-NETアマチュア無線クラブ	小山栄一（ザンビア・無線通信機・1979年度3次隊）	jk1xld@gmail.com
	地域づくり等	日本も元気にする青年海外協力隊OB会	河内 毅（グアテマラ・森林経営・2002年度1次隊）	nippon.genki.jocv@gmail.com（河内 毅）

シニア | 海外海外協力隊や日系社会海外協力隊の経験者などで構成するOB・OG会

	団体名	代表者	問い合わせ窓口
総合	NPO法人シニアボランティア経験を活かす会	政金 駿（SV／マラウイ・自動車整備・2009年度4次隊）	info@jicasvob.com （政金 駿）
在住地等別	札幌SVくらぶ	佐々木義昭（SV／エチオピア・観光施設・2003年度派遣）	ja8ve@jarl.com（齋藤邦夫）
	群馬県JICAシニアボランティアの会	籾山隆志（SV／チリ・経営管理・2015年度1次隊ほか）	momi_ja1@yahoo.co.jp（籾山隆志）
	千葉県JICAシニアボランティアの会	渡邉要吉（SV／エルサルバドル・品質管理・2009年度3次隊ほか）	info.chibajicasvob@gmail.com（濱崎 丘）
	静岡県JICAシニア海外ボランティア協会（SOVA）	原 義廣（SV／ウルグアイ・エネルギー一般・2007年度派遣ほか）	mikeda@minuet.plala.or.jp（池田昌弘）
	JICA中部コスモスクラブ	守能信次（SV／チュニジア・文化・2010年度3次隊）	morin0511@gmail.com（守能信次）
	JICA近畿シニアボランティアOV会	阪井靖史（SV／中華人民共和国・経営管理・2009年度3次隊）	banjing65@hotmail.co.jp（阪井靖史）
	JICA兵庫シニアOV会	奥野裕志（SV／ケニア・コンピュータ技術・2012年度3次隊）	mail@jhso.org（奥野裕志）
分野別	ICT海外ボランティア会	石井 孝（SV／タイ・電気通信・1999年度派遣）	kato2415@jasmine.ocn.ne.jp（加藤 隆）

その他

種類	団体名	代表者	問い合わせ窓口
親子がJICA海外協力隊に参加	青年海外協力隊の２世代参加を促進する会	羽吹 登（モロッコ・測量・1971年度1次隊）	moriohisada@gmail.com（久田守雄）

OB・OGによる

国際協力NGO

協力隊OB・OGが主宰するNGOのうち、国際協力活動に取り組む団体の一部をご紹介します。

青い空の会 白石光代（グアテマラ・花き・1999年度1次隊）	【グアテマラ】 グアテマラを対象に、支援者の声が子どもひとりひとりに届くような就学支援、伝統文化を利用し手に職をつけてもらう自立支援などを行う。現地の人たちの協力のもと、地域に根ざした活動を目指している。 http://aoisoranokai.com
NPO法人アプカス 石川直人（スリランカ・環境教育・2002年度2次隊）	【スリランカ】 ソーシャルビジネスを通した社会課題解決に注力。現在、視覚障害者指圧師の指圧院「Thusare Talking Hands」の運営、持続可能な農業技術の普及および有機食品店「Kenko1st」の運営を行う。 http://www.apcas.jpn.org
アフリカ理解プロジェクト 白鳥くるみ（旧姓：川野／ケニア・家政・1978年度2次隊前期）	【アフリカ地域】 元ケニア隊員たちが中心となって設立。可能性と世界的な課題を抱えるアフリカへの関心を高め、アフリカと日本の活力へとつなげる活動（出版、教育支援、講座の企画・開催、情報提供など）を行う。 http://africa-rikai.net
NPO法人AfriMedico（アフリメディコ） 町井恵理（ニジェール・感染症対策・2006年度派遣）	【アフリカ地域】 持続可能な仕組みによって人々の健康と笑顔に寄与すべく、「富山の置き薬」をヒントにした配置薬事業をアフリカで展開。現在、プロボノ約40人で活動し、全員がパラレルワーク。理事・プロボノを募集中。 http://afrimedico.org
アラブの子どもとなかよくする会 西村陽子（旧姓：柳澤／ヨルダン・養護・1992年度3次隊）	【アラブ地域（特にイラク）】 アラブ地域（特にイラク）を対象に、収入創出活動支援や小児がん患者への医薬品供給支援を行うほか、イラクと日本の子どもの交流促進にも取り組む。 http://nakayokusurukai.cocolog-nifty.com
A&A（エイ・アンド・エイ） 馬場節子（バングラデシュ・染色・1988年度3次隊）	【バングラデシュなど】 バングラデシュ東部で暮らす少数民族・ラカインの人々とともに、環境保護や子どもの教育支援を目的に活動する。2016年から女性の生産活動（織物）支援を開始。 http://aa2007.jimdo.com
EGAO（エガオ） 原田千晶（パラグアイ・村落開発普及員・2008年度2次隊）	【パラグアイ】 教育・農業・環境・地域経済発展を軸に、パラグアイの生活水準向上に向けた活動を行う。地域に根ざす持続可能な取り組みとするため、住民主体の運営体制を構築中。 https://www.facebook.com/ong.egao
NPO法人Growing People's Will（グローイング・ピープルズ・ウィル） 高橋和哉（ケニア・道路設計・1990年度3次隊）	【フィリピン、パキスタン、ミャンマー】 日本国内で地域づくり・障害者支援（特に視覚障害者支援）の活動を行う一方、開発途上国の就学困難児童の支援にも取り組む。 http://www.gpw39.org
COSPA（コスパ） 明智洸一郎（SV／パナマ・農業化学・2000年度派遣）	【パナマ】 パナマの野生ランの保護（エコツーリズムに基づく保護活動の指導、住民への啓発活動）、日本での啓発活動などを行う。2016～18年には、支援するラン保護施設「APROVACA」で青年海外協力隊員が活動。 http://cospa.main.jp
シリア支援団体サダーカ 田村雅文（シリア・環境教育・2005年度1次隊）	【シリア】 紛争前のシリアの日常や、紛争に苦しむ人々の声を日本で発信しつつ、他のNGOや市民グループ、メディア、ジャーナリスト、大学、民間企業などと連携して紛争終結を目指した活動を行う。 http://www.sadaqasyria.jp
NPO法人シェア＝国際保健協力市民の会 本田 徹（チュニジア・医師・1976年度2次隊前期）	【日本、カンボジア、東ティモール】 母子保健や保健教育の質向上、在日外国人支援、HIV／エイズ対策などの分野における活動を国内外で展開する。 http://share.or.jp
スランガニ 馬場繁子（スリランカ・幼稚園教諭・1986年度3次隊）	【スリランカ】 スリランカの子どもたちの学びや生活の環境向上を目的に、幼児教育支援、絵本出版、教育里親事業、障害児通所施設の運営などを行う。 https://surangani2014.weebly.com
Chemchem ya Amani Tanzania（チェムチェム・ヤ・アマニ・タンザニア） 飯山尚子（旧姓：会田／タンザニア・村落開発普及員・2003年度2次隊）	【タンザニア】 孤児など学校に行けないタンザニアの子どもたちを対象に、就学支援を目的とした「里親制度」を運営する。 http://www.cat.wanakijiji.com
中国児童教育援助協会 菅 未帆（旧姓：市橋／中華人民共和国・幼稚園教諭・1994年度2次隊）	【中華人民共和国】 中華人民共和国の農村部の子どもたちの就学支援を行う。小学校への図書の寄贈や、中華人民共和国・日本の相互理解に向けた教育の推進にも取り組む。 http://www.cceas.net
ディーヨ・フォーラム 半田好男（ネパール・理数科教師・1991年度1次隊）	【ネパール】 ネパールの支援対象としてきた地域が地震で大きな被害を受けたことから、現在は被災者支援、教育施設支援、収入創出支援活動などを行う。 yetipatra@hotmail.com
NPO法人TICO（ティコ） 吉田 修（マラウイ・医師・1988年度3次隊）	【ザンビア、カンボジア】 アフリカやアジアで保健・医療や農村開発などの分野における支援活動を行う。持続可能な自立の支援をモットーに、現地との協働を重視した活動を展開する。 http://www.tico.or.jp
NPO法人手をつなぐメキシコと日本 横尾咲子（メキシコ・体育・2003年度2次隊）	【メキシコ】 メキシコと日本の懸け橋としてユニークな文化交流プロジェクトを企画・運営。日本大使館、メキシコ文化庁、広島県など、行政からの業務委託も多く受け、両国の友好に貢献すべく多種多様な事業を展開している。 http://teotsunagu.tumblr.com
NPO法人日本・バングラデシュ文化交流会 松本智子（旧姓：佐藤／バングラデシュ・野菜・1981年度2次隊）	【バングラデシュ】 バングラデシュ・ジェソール県シャシャ郡の農村で、地域住民参加による持続可能な大豆入り学校給食、大豆食品生産、農村女性の収入向上のための伝統刺繍製品生産を行う。 http://www.jbcea.org
HOUSE OF JOY（ハウス・オブ・ジョイ） 鳥山逸雄（フィリピン・野菜・1980年度4次隊）	【フィリピン】 ミンダナオ島に児童養護施設を設立し、運営。2017年に20周年を迎え、貧しさから抜け出せるようにと育ててきた子どもは200人以上。現在も約20人の子どもと生活している。 http://hoj.jp
Bokk Jambaar（ボック・ジャンバール） オンバダ香織（旧姓：福嶋／セネガル・エイズ対策・2010年度3次隊）	【セネガル】 村落部住民への保健教育、診療所への医薬品配布、女性の収入向上活動のサポートなど、現地のカウンターパートを通じて日本から支援を行っている。 http://bokk-jambaar.org
マダムけんけんのうどんハウスプロジェクト 楠川富子（SV／カンボジア・基礎保健・2006年度派遣）	【カンボジア】 カンボジアの農村地区の小学校で子どもたちの健康と教育を支援する学校保健活動を展開。香川県とJICAの支援を受けて同国初の「学校保健室」をつくり、モデル校としている。 http://blog.livedoor.jp/madamu_kenken
NPO法人ミタイ・ミタクニャイ子ども基金 藤掛洋子（パラグアイ・家政・1992年度2次隊）	【パラグアイ、ボリビア、日本】 パラグアイの農村部やスラムを中心に学校教育支援や生活改善支援などを行うとともに、ジェンダー課題の解決のために各種プロジェクトを展開。2018年度よりボリビア農村部でも生活改善の活動を開始。 http://mitai-mitakunai.com

OB・OGによる

SOCIAL BUSINESS

「ビジネス」を通して社会課題の解決を目指す「ソーシャルビジネス」に挑戦する協力隊OB・OGの一部をご紹介します。

［凡例］

名称（名称の読みがな） 代表者	【事業対象の国／地域】 事業概要 ウェブサイト／問い合わせ窓口
株式会社ア・ダンセ 森重裕子（ブルキナファソ・村落開発普及員・2003年度1次隊）	【ブルキナファソ】 ブルキナファソ産シアバターを使った石けんなどの企画・製造技術支援・販売を行うブランド「n-Sé」（ンセ）を運営する。 http://www.a-danse.jp
afuri（アフリ） 松下 優（ウガンダ・村落開発普及員・2012年度2次隊）	【ケニア】 ケニア産のレザーとマサイシュカ（ケニア・マサイ族の伝統的な布）を使ったバッグやポーチなどの輸入・販売を行う。 http://afuri-jp.com
アフリカ工房 前田眞澄（旧姓：鈴木／ガーナ・村落開発普及員・2001年度2次隊）	【ガーナ】 ガーナ北部の村からフェアトレードで輸入したシアバターを原料に、化粧品の製造・販売を行い、日本とアフリカを笑顔で繋ぐ。 http://www.africakobo.com
株式会社andu amet（アンドゥアメット） 鮫島弘子（エチオピア・デザイン・2001年度3次隊）	【エチオピア】 世界最高峰の羊皮「エチオピアシープスキン」を贅沢に使用し、製品も製造過程も美しいものづくりを目指したラグジュアリーなレザーブランド。2018年には表参道にコンセプトストアをオープン。 http://www.anduamet.com
株式会社アンバーアワー 木村陽介（ケニア・村落開発普及員・2011年度4次隊） 岡本ひかる（ガーナ・プログラムオフィサー・2011年度4次隊）	【ケニア】 軽くて丈夫なサイザル繊維を用いたカラフルなハンドメイドのかごバスケット「ORIKAGO」をケニアの女性たちと共に企画・製造・販売する。 http://www.amberhour.com
YETI COT（イエティ・コット） 上坂とよ子（旧姓：渡部／ネパール・家政・1984年度2次隊）	【ネパール】 ネパールの女性自立支援団体「WSDO」の商品を中心に、同国で生産される布製品や雑貨の輸入・販売を行う。 http://yeticot.shop-pro.jp
縁結び工房 内山千尋（タイ・日本語教師・1994年度2次隊）	【タイ・ラオスを中心とする東南アジア地域と日本】 タイやラオスの織物の村で織られた絹紬から仕立てた茶道用帛紗などの茶道小物の企画・製造・販売、茶道入門講座や気軽な茶会の実施を行う。 http://emmsu-tea.jp
株式会社Girls, be Ambitious（ガールズ・ビー・アンビシャス） 山田麻樹（フィリピン・村落開発普及員・2010年度2次隊）	【フィリピン】 フィリピン産のモリンガやココナツオイルなどを素材とする食品や化粧品などの企画・輸入・販売を行う。 http://www.girls-be-ambitious.com
カンガ屋 katikati（カティカティ） 柳澤栄次（ケニア・村落開発普及員・2009年度3次隊）	【ケニア】 東アフリカの民族布「カンガ」専門店。カンガを使ったオーダーアイテムの製造・販売を行う。 http://katikati-kanga.com
Kenya Fruits Solutions Ltd.（ケニア・フルーツ・ソリューションズ） 山本 歩（ケニア・村落開発普及員・2011年度2次隊）	【ケニア】 ケニアの農家の収入安定を目的に、干ばつ耐性の強いマンゴーやパイナップルなどを原料としたドライフルーツの製造・販売を同国で行う。 http://kenyafruitssolutions.jimdo.com
Semilla（セミージャ） 白石光代（グアテマラ・花き・1999年度1次隊）	【グアテマラ】 グアテマラの誇る織物やビーズを使った民芸品の企画・製作・輸入・販売を行う。作り手である村の女性たちの経済的自立を目指している。 http://semilla.ocnk.net
Tau mock tiet（タウ・モック・ティエット） 松島 愛（カンボジア・織物・2003年度3次隊）	【カンボジア】 カンボジアの伝統的な布「クロマー」を綿100パーセント・天然染色にこだわり制作。ショールや子ども用帽子の企画・販売を行う。 http://www.taumocktiet.com
タツノオトシゴプロジェクト 丸山ちさと（ガーナ・青少年活動・2012年度2次隊）	【ガーナ】 ガーナに設立したNGOで障害者の雇用を生むために伝統織物「ケンテ」のショールの販売、日本のアパレル会社からの製品受注などを行う。 http://ta2nooto45.base.ec
daladala（ダラダラ） 佐屋 眸（旧姓：小畠／モンゴル・デザイン・2007年度3次隊）	【モンゴル、アフリカ地域】 モンゴルの羊毛フェルトやアフリカ伝統の素材を使ったハンドメイド製品の企画デザイン・輸入・販売を行う。 http://daladala.jp
chaokao material（チャオカオ・マテリアル） 高野繭子（タイ・手工芸・2003年度3次隊）	【タイ】 タイ山岳民族の伝統刺繍や織物を使ったオリジナル雑貨の製造や、素材の卸販売を行う。 http://chaokao.org
Teebom（テーボム） 今井奈保子（スリランカ・村落開発普及員・1993年度2次隊）	【スリランカ、インド、ペルー、ケニアなど】 スリランカの紅茶をはじめ、インドやペルー、ケニアなど世界各国の食品や雑貨の輸入・販売を行う 。 https://fairtrade-teebom.com
Vanilla House（バニラ・ハウス） 小瀬一徳（パプアニューギニア・ 製材・1993年度2次隊）	【パプアニューギニア】 パプアニューギニアで栽培されたバニラビーンズ・カカオ豆などの農産物やその他加工食品の輸入・販売を行う。 http://www.vanilla-house.com
有限会社バンベン 坂本 毅（中華人民共和国・日本語教師・1991年度1次隊）	【中華人民共和国】 中華人民共和国・内モンゴル自治区オルドスの砂漠緑化支援を目的に、同地産の岩塩や重曹などの輸入・販売を行う。 http://banben.jp
株式会社豆乃木 杉山世子（ジンバブエ・ソフトボール・2000年度1次隊）	【メキシコ】 メキシコのマヤ先住民が無農薬・無化学肥料で栽培する「マヤビニックコーヒー」などの輸入・販売を行う。 www.hagukumuhito.net
LakLiya（ラクリヤ） 青木杏里（スリランカ・観光業・2008年度4次隊） 冨山あすか（スリランカ・コンピュータ技術・2008年度4次隊）	【スリランカ】 スリランカの女性生産者団体「ラクリヤ」のハンドメイド品を中心に、スリランカ雑貨の企画・輸入・販売を行う。 http://lakliya.com

進路開拓インフォメーション

JICA海外協力隊経験を生かした
キャリア形成のための情報を紹介します。

JICAによる帰国したJICA海外協力隊員への進路開拓支援

※対象は、青年海外協力隊および日系社会青年ボランティアの経験者です。

進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役

帰国隊員を進路決定までサポートする「進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役」。就職・進学を始め各種情報の提供や帰国後のキャリアに対するカウンセリングなどを行います。2018年10月現在、全国に20人を配置。各カウンセラー、相談役の連絡先などは下記ウェブサイトをご覧ください。

URL https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

教育訓練手当

進路開拓に役立つ技術・技能の修得や免許・資格の取得につながる教育訓練を受ける場合に、その経費を一部支援する制度です。下記ウェブサイトで受給資格や申請手続きなどを紹介しています。

URL https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/allowance/

帰国隊員進路情報ページ

国際協力キャリア総合情報サイト「PARTNER」上の「帰国隊員進路情報ページ」では、企業などからの帰国隊員用求人情報を提供しています。その他、進学やセミナー情報、進路開拓に役立つコラム集なども掲載しています。

URL http://partner.jica.go.jp/CareerInfo

JOCV枠UNV制度

国際協力分野でのキャリアアップを目指している帰国隊員に、再び海外での協力活動を行う機会を設けています。国連ボランティア計画と提携し、UNV派遣にかかる費用をJICAが負担する制度です。国連機関での活動を希望する方は、ぜひご活用ください。

URL https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/unv/index.html

自治体・企業向けJICA海外協力隊帰国報告会・交流会

JICA海外協力隊の活用に関心を持っている自治体や企業などの関係者が参加し、隊員からの活動報告の後に交流会を3カ月ごとに開催しています。それぞれの団体の活動状況や、どのような人材が求められているのかを知る良い機会であり、この交流会をきっかけに参加自治体・企業の研究を始め、就職に至ったケースも少なくありません。各隊員には帰国直前に在外事務所を通じて案内していますが、進路開拓中の隊員も参加可能です。次回の開催など詳細については、下記メールアドレスにお問い合わせください。

■問い合わせ先
JICA青年海外協力隊事務局　人材育成課
帰国後研修・交流会担当
jvtpc-sinrosien5@jica.go.jp

交流会は、関心のある企業・団体の担当者に話を直接聞ける絶好の機会

JICA海外協力隊経験者等優遇措置
（自治体職員・公立学校教員採用試験／大学・大学院入試）

近年、JICA海外協力隊の経験を評価する自治体、教育委員会、大学が増加しています。右記ウェブサイトでは、JICA海外協力隊経験者に対し、自治体職員・公立学校教員の採用試験で特別選考制度を設けている自治体や教育委員会、入試などで優遇措置を取っている大学・大学院を紹介しています。

▸自治体特別採用枠
URL https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/careerinfo/pdf/jichitaishokuin.pdf

▸教員特別採用枠
URL https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/careerinfo/pdf/kyouin.pdf

▸大学・大学院の特別入試・受験枠、特別措置制度
URL https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/careerinfo/pdf/daigaku_yugu.pdf

URL ウェブサイト　eメール

JICA INFORMATION

JICA国内拠点の紹介

全国16カ所にあるJICA国内拠点。開発途上国と日本の各地域を結ぶ架け橋として、地域の特色を生かした国際協力を推進市民やNGO、地方自治体、民間企業などと連携して推進しています。各拠点では、就職・キャリアアップ・スキルアップのセミナーや、国際協力に関連する各種セミナー・写真展などを開催しており、国際協力関連の資料なども閲覧できます。

また、全国3カ所にある「地球ひろば」では、世界が直面するさまざまな課題や、開発途上国と私たちとのつながりを体感できます。ぜひご利用ください。

名称	所籍地域
①JICA北海道（札幌）	北海道（道央・道北・道南）　ほっかいどう地球ひろば
②JICA北海道（帯広）	北海道（道東）
③JICA東北	青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県
④JICA二本松	福島県の広報・開発教育支援事業
⑤JICA筑波	茨城県、栃木県
⑥JICA東京	群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、新潟県、長野県
⑦JICA地球ひろば	
⑧JICA横浜	神奈川県、山梨県
⑨JICA駒ヶ根	長野県（ボランティア事業の派遣前訓練、施設訪問受入れ）
⑩JICA北陸	富山県、石川県、福井県
⑪JICA中部	静岡県、岐阜県、愛知県、三重県 なごや地球ひろば
⑫JICA関西	滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、 和歌山県
⑬JICA四国	徳島県、香川県、愛媛県、高知県
⑭JICA中国	鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県
⑮JICA九州	福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、 宮崎県、鹿児島県
⑯JICA沖縄	沖縄県

■所在地・連絡先など詳細は以下のウェブサイトをご覧ください。
URL https://www.jica.go.jp/about/structure/domestic/

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会「大会ボランティア」へ応募される方々へ

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会より、大会ボランティア応募登録におけるJICA関係者用の識別コードが発行されました。このコードを登録することによって協力隊経験者として識別されることとなります。既に応募登録された方もコードの追加入力は可能です。コードをお知らせしますので、これから登録される方も下記メールアドレスまでご連絡ください。

jvtpc@jica.go.jp
■件名：東京2020コード
■本文：①お名前　②隊次　③派遣国　④職種

JICA海外協力隊OB・OGへのお願い
～青年海外協力隊事務局より～

連絡先変更・情報提供のお願い

青年海外協力隊事務局では、帰国された隊員の皆様との関係を保ち、情報を共有したり、ご意見をお聞きしたりすることが、事業改善を進めるうえで重要だと考えています。そのため、住所変更などが生じた場合は、「住所変更届・進路現況連絡票」（下記ウェブサイトよりダウンロード可）のご提出をお願いしています。年に1度、OB・OG向け『クロスロード』をお送りするためにも必要な情報になりますので、よろしくお願いします。また、皆様の周りで連絡先が変更となった方がおられましたら、「住所変更届・進路現況連絡票」のご提出をお伝え願います。

なお、メールや電話、郵便等で、事業の改善や見直しに関するアンケートをお願いしたり、さまざまな分野で活躍されているOB・OGの方のご紹介をお願いしたりすることもあるかと思いますが、その際はご協力をよろしくお願いいたします。

■住所変更届・進路現況連絡票
URL https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/procedures/documents/index.html

■各種届出の提出先／問い合わせ先
JICA青年海外協力隊事務局　人材育成課
jvtpc-sinrosien1@jica.go.jp

2019年度春募集へのご協力のお願い

より多くの方にJICAボランティア事業を知っていただくために、みなさまのお力をお貸しください！　お勤め先、お知り合いのお店、町内会掲示板などへのポスターの掲示にご協力いただける方は、Eメール、FAXまたは郵送にてお申込みください。

※送付枚数が上限に達した時点で、受付を締め切らせていただくこともございますのでご了承ください。

2018年度の募集ポスター（デザインはお送りするポスターと異なります）

■送付物：
2019年度春募集広報用ポスター
（B3サイズ：364mm×515mm）

■送付時期：
2019年3月中旬予定（折り畳んだ状態でお送りします）

■申込・問い合わせ先：
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル
JICA青年海外協力隊事務局
jvtrd@jica.go.jp　FAX 03-5226-6379

■ご連絡いただく内容
件名：2019年度春募集ポスター申込
本文：①お名前、隊次、派遣国、職種
②ご住所（ポスター送付先、日本国内のみ）
③ご希望枚数（お1人3枚まで）

クロスロード
発行日　平成30年12月1日
編集・発行：独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25二番町センタービル
TEL：03-5226-9814　FAX：03-5226-6379

※本誌に掲載されている記事等の内容は執筆者の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。
落丁・乱丁の場合はお取り替えしますので、発行元までご連絡ください。

クロスロード
2018年12月1日発行　編集・発行　独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局　〒102-8012 東京都千代田区一番町5-25 一番町センタービル　TEL:03(5226)9814　FAX:03(5226)6379

JICA海外協力隊の“今”がわかるウェブサイト

OB・OGがつながる・知る・参加するためのサイトをご紹介します。
「JICA海外協力隊」ウェブサイトトップページ ▶▶▶ https://www.jica.go.jp/volunteer/

JICA青年海外協力隊事務局公式Facebookページ

https://www.facebook.com/jicavolunteer

青年海外協力隊事務局の公式Facebookページでは、JICA海外協力隊に関するさまざまな情報をお伝えしています。派遣中隊員の活動、テレビなどのメディアへの登場、イベントなどに関する情報を随時紹介。たくさんの「いいね！」をお待ちしています。

JICA青年海外協力隊事務局公式Twitterアカウント

https://twitter.com/jocvjimukyoku

JICA海外協力隊に関連すること、派遣国の話題、日本国内でのイベントなど、さまざまなことをやわらかめにつぶやいています。ぜひフォローをお願いします。

YouTube／JICA青年海外協力隊公式チャンネル

https://www.youtube.com/user/jicajocvsv

JICA海外協力隊の活動や派遣前訓練、帰国後の活躍などの紹介、選考試験合格者へのインタビュー、JICA海外協力隊への理解を深められるセミナーの模様などを動画で公開します。

OB・OGのお役立ち素材・サイト

JICAのウェブサイトでは、協力隊経験などの発信に便利なツールを紹介しています。
ぜひご活用ください。

マンガで知る青年海外協力隊

https://www.jica.go.jp/volunteer/manga/

JICA海外協力隊員の実話に基づくストーリーをマンガ化しました。協力隊になったきっかけや、山あり谷ありの現地での活動、気持ちの変化、帰国後の進路。小中学生用にフリガナもつけ、誰にでもわかりやすい内容にしています。
協力隊の導入編に便利です。

マンガで知る青年海外協力隊　検索

JICA地球ひろばHP内の「先生のお役立ちサイト」

https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/index.html

先生のお役立ちサイトでは、先生に限らず、出前講座や国際理解教育・開発教育でご活用いただける教材の掲載や配布、貸出をしています。
映像教材などのダウンロードもできます。

JICA　お役立ちサイト　検索

OB・OG向け　各種イベント情報

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/info/events

帰国したOB・OGが開催するイベント情報を、JICA海外協力隊のウェブサイト内に掲載しています。掲載申請手続きを行うことで、OB・OGに関連するイベントの告知もできます。掲載を希望される場合は、掲載申請手続きの案内ページをご覧ください。

JICA　OB・OG関連のお知らせ　検索

※上記ウェブサイトは変更の可能性がございます。予めご了承ください。